

1988

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十五年七月一日發行(每月一回一日發行)

永樂町人 編輯



【第九十八號】

七 月 號

ルービロポツガ

シンロトシンポリ



丁子屋洋服店

頭の方より足の方まで

と云ふ趣意にて洋装に必要な附属雑貨部を開設致しました。實用向から高麗品迄ストック取揃へ、種々な品を極めて薄利で御便利に御提供申します。何卒丁子屋の洋服同様御評判の程御願申上げます。

▲雑貨部品目

帽子、ワイシャツ、カラー、ネクタイ、ボタン類
メリヤス、セーター、沓下、手袋、首巻、スカーフ、ハンカチーフ、小供セーター、下着類

毛布新着

有名なロシア毛布各種、旅行用として最も妙
日本毛織特製茶毛布各種、寝具用として必需品

京城南大門通り

丁子屋洋服店

電話本局 三六四二長 七九二二 一〇九〇三 番

休日無し毎日午後九時迄営業

側用の郵便は店内雑貨部御呼出御下度

市内は御一環次第類品持参貴覽に供し申候

社會式株業紙本日

店支城京

目丁二通門大南府城京

◎ 銘 仙 と

毛 糸 ◎

秩 乃 海 也

堀 内 満 輔

電話局 八五五 九〇〇 〇六五 番

◎ 多少に拘らず御用命

の程を願ひ上げます

金剛煎餅 金剛饅頭 金山

菓用應花松實松産山剛金

食剛金

京二
町本城丁
目

店商屋龜

番七十二話電本
番五七四局本

金剛柏子鹽松の實 妙り實
金剛柏子菓松朝の實菓子式

金剛おこし
金剛しるこし

◆無駄ばなし

吉田 莊一

西瓜

澤村 亮一

眞瓜や西瓜が食卓を彩る頃になつた。

僕の郷里にとても西瓜の好きな先生がある、季節になると三度の食事は缺かしても西瓜を組上りのせぬ日はないと云ふほどの嗜み方、昔季廳(こ)は秋風の動くに乘じて鱸の味を蒸ふて旨を齎つたさうであるが先生は炎風の動くに際して西瓜を想ふて夢に見たと云ふことほど左様に西瓜なくては夜の明けぬ御仁である。

未れ故郷が神戸に住んで居つた頃は、南京町の店頭には胡瓜や茄子の走り品が薫るようになると、若十の西瓜を適早く求めて購ふことを年中行事の一にして居つた、神戸から夕方出帆する船便に托送すると、薩摩屋のそと吹く南國の先生の門に翌朝は着く。

或時西瓜受取の禮に次の如き手紙を寄越したことがあつた。

『圓々の明月儀の茅摺に入り、兄の寄興のもの之を第一便と致し候、銀刀一闪、滿盤の紅雪撥端に迸り、清涼の氣草や身に沁するを覺え、又人間炎熱の何の地にあるを知らず、僕の銷夏の方は海に非ず山に非ず、一に我が雙見の歡談を聞めたる、此の圓々のものは是に候、多謝』

而して其末尾に、

『西瓜の如き圓満と、肉實せる赤誠を以て人に接せよ』

と懇ろに付け加えてあつた。

◎鶴鐵の森さん、夏帽を稍々あみだ加減にして、とつと電殺筆を出て行く。

◎『どちらへ』といふと、ニコリと大きく笑つて『野球々々、君もどりだね』……いかな炎天でも脂汗を流し乍ら『さて、野球といふものは、どうして斯う涼しいかネ』

◎三年前、氏を殖銀野球總援團長に推戴するといふ議があつた、スト『島渡待つてくれ、エーと俺は四十二だ、子供が五人ある、野次の親方は勘辨してくれ……』これでヤット助かつた。

◎そこで、お餘は今井さんに廻る。今井さんは觀覽席の人中で、ウームといつて、牛をしめるやうな大きい苦痛を發する人である。ナニ辨當を過ぎてお腹が苦しいのぢやない、試合が我意を得た時、乃至危巖に髪のパツミを外した時、おもはず魂の底から叫び出すのだ。同時に膝頭で、前の人の背中をトスンと突く。多少暴力的危険性はないでもないが、それだけ熱誠、忠實、格闘、精勵……といふので、とら／＼光榮ある名譽團長。

◎鈴木商店の澤村さんイヤ忙しいの、何のツて——この間も社に電話をかけて『原稿紙をスグ……』『どうしたんです?』『イヤ今、三十分ほど閑がある、これからスグ書く、大ききで……』そこで自轉車で走らせる。夕方にはモウ郵便で着く。それが上菟の『西瓜』だ。敢て暑中御貞舞として、一切れづ／＼賞儀におわけ申上げる。

俠客論

中島司

京

城

雜

筆

五月雨の雲吹き落せ大井川

——芭蕉——

梅雨空そのものやうに鬱陶しい現代日本の社情相を如何に見るぞ。長家の『興さん』が舞臺熱に浮かれて混血兒を生産し、名門の『未亡人』が運轉手に血迷つて詐欺を働き、名譽ある『高等官』が砂利やレールを食つて暗黒病院に追込まれ、威信そのものたるべき『大将閣下』が機密書を私したと指彈され、光榮ある『代議士』が藩邸の不浄盆に職を賣かし、學問來り數へ來れば言語同斷の不埒沙汰かその日その日の新聞記事を賑はしつゝある時世である。よそことはな、公憤がむらくと起つて、此のゴキ溜めのやうな世の中を、正義のタンクで縦横無忌に押し潰し踏みたくたくなる。かゝる時、愛讀の史記を讀み、偶ま遊俠傳を讀むと、思はず此の胸がスルスと開けて、暗い心が明るくなる心地がする。僕は俠客傳を讀むのが大好きだ。

俠客にもいろいろあつて、一がいに腐敗はできないが、人間誰れしも神の如くに完全なるを得ない以上よしや其の爲す所善意の悪事とすべきものありとも、どうしても其の惡を憎めないのが俠徒に對する僕の心算だ。

史記の善者司馬遷曰く『遊俠は其行正義に不軌なりと雖も、然か

も其の言は必ず信あり、其行ひ必ず卑す。己に諾して必ず誠あり、其體を愛まずして士の陋因に赴く既已に存亡死生す、而かも其能に殆らず其の徳に依ることを羞づ』と。若し僕をして理想的の俠客とは如何なるものぞと言はしめるなら、僕は此の司馬遷の所言をそのまま引用し來るであらう。

色は淺黒く、からだは太り氣味でも肉は引き締り、柔しい眼險の奥に一道の光芒を藏し、言葉少なく音聲は穩やかにして底力あり、應接態度尋常にして謙謙、しかも一言にして他の肺腑を抉るほどの潜力あり、先づ斯う言つた人物なら僕の理想の俠客だ。貌を以て人を取るは往々體走ちかひとなるが性情は目づからにして外に顯はれるもの、苟も親分として衆に推服せられ、衆を命從せしむるほどの人物ならば、たとひ短軀瘠身の男たりとも、必ずや侮るべからざる外貌を有するであらう、況んや堂々たる體軀の持ち主に於ておや。

強がるのが任俠の本領でない、人情に脆きもまたその美しい弱點とすべきであらう。教うて誇らず、施こして求めず。義に依つて財を散するも、曰れば邊幅を飾らず、質實を尙ぶ、權勢を飾れず、富貴に阿ねらず、一諾なくして意氣に感ずれば成否を打算せず。斯ういふ人なら眞に頼もしい男の中の男

一延だ

俠客に大切なるは『義理』の二字だ、清水の次郎長と馬駒の勝藏が、富士川べりで據らない喧嘩をするについての義理堅い出入りの話はいふ例であらう。勝藏はその子分の小岩を清水に遣はして果し状をつけた、次郎長は自ら小岩に會つて『果し状の返事は貴方から改めてする』と告げた、去るに臨んで小岩は、『オイ清水の貸元、お爺さん外に忘れものはあるめえな』と念を押した、次郎長は『無い』ときつぱり答へた、俠客同志が喧嘩をするに、その喧嘩を吹き掛ける使者に立つた者は、先方で殺されるのが常法とされた、それを次郎長がそのまま歸へさうとするので、小岩は『おれの首を取るのが忘れたの』と諷刺したのだ。やがて次郎長は子分の鬼吉といふ元氣者を使として甲州の勝藏の處へ喧嘩承諾の手紙を手交させた、鬼吉は無闇甲州で斬死をする積りで居た、然るに勝藏は鬼吉と面會して御苦勞と言つたまゝ引つ込まうとした、鬼吉が『オイ馬駒の貸元、おれはこれから刀を抜いておはれるぜ、覺悟はいか』と長脇差のつかに手をかけた、すると勝藏『いやうだんぢやねへ、そんなことをしてはおれが困る、きさまを殺しては清水のに濟まねえ、おれの果し状を持つて行つた小岩を次郎長が生かして歸へした、その次郎長の使のめえを殺しちや、おれの義理が立たねえ、喧嘩は喧嘩、義理は義理だ』と言つて鬼吉を無事にかへした。

『喧嘩は喧嘩、義理は義理』、何といふツツバリした言葉であらう、この義理堅きこそは、日本の武士道、大和魂の精髓ではないか。

ポンペーの昔

山田一隆

十勝嶽の噴火、北湘町の災害、日本海底の隆起、ビルマの地震等引續き新聞紙に報せられる、火山の活動期であると、天變地異は時々だし抜けて我々を脅威する、我々の社説を宛てて居る様にも見える、不安の様でもある。

今は昔二千六百年前羅馬帝國のポンペー町はタエスビオの大噴火で、其の美しい歡樂の町は、一夜にして土中に埋没されたのである。丁度僕は一千九百二十三年歐洲旅行の途次、この地を訪れることが出来た、今日此頃京で線路まぶらの樹影を受けたる洋間のソファに仰臥して、此頃の新聞の災害記事を見て居ると、聯想が旅行に待たれて何むでも、二千六百年昔のポンペーの町が浮んで来る、紀念に拾つて来た、棚の上に置いてある溶岩の小片を眺めて、俄に雜筆をのたくつて見たくなつた。

ポンペーは、伊太利の南端地中海に面せるナポリに近き所で、此邊正月でも暖きこと日本の春の如し、伊太利は半島ではあるが、一體風土と云ひ民族性と云ひ、一寸日本に似て居る點がある。ポンペーを一瞥にして葬り去つたタエスビオ火山は、ナポリから遙に望むときは如何にも穩で白き煙を靜に立て、居る、而して其の姿を濃き緑色のナポリ灣の水面に寫して居る景色は得も云はれぬ、而して古

ポンペーの廢墟は今政府の保管の下にある、大體は發掘されたが今尚は多數の人夫を使役して發掘しつゝあるを見守けた。

廢墟のポンペー町に入ると、すぐ博物館がある、其の昔の時代にあつたものが蒐集されてある、人の化石もある、器具もある、當時の文明を知るに足るべき好個の資料はかりである、而して其の入口からズン／＼奥に渉りて道路がある、それが右邊で出来て居る、廣くはないが何處迄も續いて居る、其の上に車の軌りたる痕跡さへ深く刻まれたるまゝ殘されて居る。町には寺院がある、裁判所がある、演劇場がある、浴場、水族館、遊廊、酒場等が残つて居る、浴場には繪畫する部屋も残つて居る、浴室は浴場に西洋でも附ものであると見える、例の博物館には金屬製の子宮鏡も殘されてある、思へば二千六百年の昔、既にこの制度のあつたなどは實に驚異に價する、又この廢墟には女郎屋が遺されてある、其の振つて居ることは女郎屋の看板や、其の道しるべに驚かす様なものがある、餘り書くと風俗を擾亂する虞があるから此の邊にして、女郎屋の發展して居つた事實又は想像することが出来る。それから道路に面した處に酒場が多い、樓臺屋の釜の如き式に酒壺の觀が店頭に着かれ、ある

面して納付が何か平穩なものであると思はれる、それから當時既に水道の設備も出来て居つたと見える、其の材料は最も幼稚ではあるが鉛管の様なものが家屋の屋根の下にアラ下つて居る、今の様に地下を通じたものではないらしい、曾は相當の家には石造の日時計や當時の彫刻文繪畫が残つて居る。

兎も角二千六百年前丁度我邦紀元の頃、斯の如く遺跡に、水道に斷場、浴場、繪畫、彫刻に其の他發達したる文明を持つて居つたことは目前に見える様だ、而して一面には稠密し切つた遊蕩趣味にあつたことも認め得られる、然もこの榮華の夢は二千六百年前一息にして種けるタエスビオの赤い舌で舐められて仕舞つたのである。

僕はポンペーを見てタエスビオに上つた、火山と云は日本にも富士を系統する火山を持つて居る伊太利も、タエスビオやエトナを持つて居る、やはり火山帯である、頂上に到り噴火口を眺むれば數丈の火柱は數分置きに音をなし噴出し溶岩を飛散して居る、實に物凄く感じがする、俯して滅亡されたる昔のポンペー町を見ると色々の感が起る、徳富蘆花氏は其『日本から日本へ』に同氏の登山の感がある、僕もそゝ思ふ、而して同氏は人間は兎角完成したものであるとして、又地球は固形物即ち死物として人々は取扱ひたがるが、然し自然生きて居る、又未成品である、又不測の變化を豫料して居る事を具體的に示して居るものは火山である、地球が未成品であるが如く人類も未成品である、又何人の靈魂も未成品であり火山である故に何れの國にも火山がある、凡

ての世界は新天新地である、これからこの火山の活動期に入ると

造一建設し。火山は遠きにあらず、自餘界のみに限らず、島群島の

ての世界は新天新地である、これ
からこの火山の活動期に入る、と
云ふて居る。

僕は誠に面白と思ふ、世界戦
争―外交―産業經濟―政治―宗教
―教育―藝術―科學―。破壊―創

造―建設―。火山は遠きにあらず
自然界のみに限らず、嗚呼吾の
ポンペーを想起す火山は常に吾人
の人生に續はつて居ることを覺悟
せねばならぬ。

(大正十五年六月一日)

人の世

古河隆美

エマーソン氏謂へり、"Men are born to
write." (人は書くべく生れて居る)、換言すれば
人は常に思ふことを書き表はして居るものである。

雜筆記者は余に何か書けと云ふ。そこで、常に思
ふて居ることを書いて見よ。

人の世は誠にむづかしい、智慧を以て事を處せば
角が立ち、感情を以て事に當れば船を壊されるやう
意地を通せば物事が窮屈になる、實に人の世は住み
にくいものである。

住みにくい世の中に、秀才だからとて不注意で、
感情で、其の上我儘者では名を擡げたものは無かる
。たとひ頭が鈍くても注意深く、勤勉で、そし
て志操の高いものは成功の實例がある。

して見れば如何に住みにくい世の中でも、勤勉で
而かも人格の修養を積めば難なく世渡りが出来るの
である。

勤勉と人格、一と口に言つて仕舞へば何の事は無
いが、ソレが誠にむづかしい。

むづかしいと覺りたるとき、始めて詩が出来、歌
が出来、畫が出来、文が出来。

證し語れば、人世は自然に従はねばならぬもの
である。自然に逆行して、無理して、人の世が渡れ
るものではない。

江湖風聞記

吉田 莊一

◎前號に下村博士から原稿を頂
いたが、氏は何をやつても、スグ
友人の域に達する人で、その球つ
きでも、長唄でも、遠く素人放れ
がしてゐる。それに藝は人なりで
何所か妬めけがしてゐる所は、争
へないと思ふ。

◎高橋利三郎氏は、逓信局の庶
務課長、あの大世帯のお合所を切
つて廻す人だけに、五分の隙もな
い。親切で、行届いて、會つてま
ことに氣持がいい。

◎眞鍋篤善法院長 眞實が道樂
で、日曜にはノコノコ郊外へ御出
張、見かけは平々氣ない先生だが
アレで西洋音楽が大好き。御家族
と共に熱心に御修業中。

◎平塚の植原隆事長さんが異彩
ある人である。禪の修業も十餘
年。遂に死生の縁を超えて、動せ
ざること百歳の如しだ。

◎吉武繁壽士は、杉山其日庵
(茂丸)の門生、十餘年をその玄
關でそたつただけ、何所か通つた
ところがある「壽司を食ひに行かう
か」「ウム」、「體たしやうか」
「ウム」「鳥かいいか」「ウム」。
「オイ／＼一體君はとつちがいゝ
んだ」「ウムとつちでもない、こ
うに斯うして腹ばつて話してゐる
と、それが「等よささらだな」

◎旗り姓の工藤武城さん、目下
病院を改築してゐるが、今度は建
築興味にスツカリ共鳴したと見へ
續き詩もソツチのけ、頭領と共に
六月の炎天の下で「そして頭領、
この二十三卒だが……」などと
初めやうものなら、何をいつても
フエッ、フインで、裏に没頭領。

友蓬棚おろし

渡邊得司郎

×

出さずで出ないは青原何とか云ぶが、書くく云うて書けないのは頼まれた原稿だ。それも長いものなら色々な揮毫も出来るし、左程むつかしく思はぬが、隨感とか雑筆とかの短いもの程辱らされる。それに無稽な僕は性分としてせつば語る迄どうしても本氣になれない。ほんの貴ぶさぎにお笑ひ草を紹介する。

×

僕の友人で日頃ひよろきんなA君、或る宴會でしたうかきこし召し、歸る時に料亭の玄關で袂から出して女中に渡した一物、下駄札と思ひきやこれはしたり、星製品の何とか警防樂であつた。この變つた下駄札を受取つた人の驚いた顔よりもA君のきまじりたるさ。あとで女中のわる口に『あんなかたは猿殿を裏返しにはいて歸る人です』

×

A君によく似た方たちで、宴會などで舞く歸る時は、其晩にかぎつて妻君のみやげを買つたり、翌日は子供のお守などを殊勝らしくやる男がある。或時のこと、先生一寸演よりをしての歸るさ、敵を欺く計略とでも出たのならう、まさか良心の苗貴とまでは行かなかつたやうだ。例によつて機織取のお土産をぶらさげて歸つた。『工度よ、特價品が有つたからね』。妻君喜ぶと思ひのほか、稍機織斜めで、『どうせ、あなたの買つ物はトツカピンでせう』

×

妻君に對して絶對權をふるふのも感心しないが、餘り濃厚なものもあてられる。僕の先輩で兩着兩着圓満振りを發揮し、しかも主人は妻君の美貌が自慢ときてゐる。何かの序でに、談たましく妻君連の品さために及び、同氏の妻君の話しが出ると『あいつももう、年を取りましてねえ、先生は本氣らしい。』

(未完)

法曹界閑話

平田久雄

◎法曹界の長老で、何となく天命に安心したといふ風格を有つてゐるのは、加古貞太郎さんだ。

◎優秀のクリスチャンでなく、署名のワイ／＼者流でなく、心靜かに世用を凝視して、獨目の人生觀に安定してゐる概がある。

◎しかし、この温厚な長老も、時々疾言をなすことがある。どうかすると、慨然として『マリ庵のいふことは十年早いんだ……』長老加古さんだつて、決して世を見切つてゐるのではない。彼は本質としては一種の熱情男子らしい。

◎御倉老の目録は、その目録の新邸だ。實際それは仲々よく工夫されてゐる。そして老は、賓客をその目録りよき南窓の、一間廊下に導き、二十年、廿五年手入れしたといふ盆栽を『つ御高評を願ひますか』斯うなると年日ぐらゐは扱つて放さない。

◎部屋から部屋へ手製の放聲管を通し『これだけは皆さんにおすゝめしたい』といつて、早速放聲管の活用『オイク／＼お台所かね、一ツ二階まで香茶をたのむ』そしてクルリと旋返つて『これで女中が此所まで、何の御用と無駄足踏む必要がありませんや』

◎會へば面目いだが、賢明忠良な側近者が居つて、客を撃退することを以て第一忠節と心得てゐるのが横田さん(高等法院長)だ。可哀さうに物買ひでもない通中が、暑いところをスゴ／＼引返つて行く。

◎民間での會えない人、會はない人は堀直喜さんだ。これも忠良な執事が居つて、『何の御用事でお出でか』一應御訊問には恐縮。

水の誘惑

尾山藤一

春水満四澤

ぬるぬる春の水、ゆるやかな流れ、果てしなき野は緑の床を敷き、聳すべき小鳥は空に唄つる、銀鱗に似たるささやかな流れにうつる小さな魚、世は長閑な限りである。

夏雲多奇峰

今にも降り出しそうな空の色、むくくと廣がつて行く雲、ごろごろ鳴り出す雷の音、世はいよいよせわしくなつて来る。

長閑な春にも、せわしい夏の夕にも日常私共の生活に一日も缺くことの出来ないものに水がある。

渴したる時に人は水を飲む、咽喉を潤す僅か一掬の水にも千萬無量の甘味がある。下世話に曰く酔ひさめの水、戸知らずとか、まこと甘露に似たる水の味、といふといかにも私は斗酒尚能酔ないやうに聞えるが、左の方は一向酔目であることを銘記して置く。

水はまた行きつまりたる人間をも呑み、怒濤逆巻く大洋の中へ、飛沫半似を飛ばす懸崖へ、痴情の果、失戀の果、家庭不和の果、生活難の果、不義不正の果、いつれは首のまがらぬ連中の呑まれて行く水の中、死するまで誘惑されて行く人間の弱さ、こゝにも強い水の誘惑がある。

古池や蛙飛びこむ水の音

私はとても水を愛する。それは女性的である。

半面に又男性的であるが故に、方圓の器に従ふ従順と又嚴をも通す剛毅とが實に水にして始めて得らるゝ事である。

私の故郷は百萬石の城下である。その金澤から三里ほど白山の麓に近い、名もなき小さい村に不思議な水の涌出がある。六十二年年目毎に涌き出づる薬水であるそうなる。その薬水は信するもののみ効驗あらたかといふので、僅かの水を賣ぶ可く三里五里の道も遠しとせず、夥しい人出であつた。それは私が七つ八つの頃であるから、今がらさつと二十幾年が前の事である。丁度その薬水が涌出する年であつた。

Kといふ町から女連れの水賣ひの一行が朝まだき頃、うすばんやりと颯つた松並木街道を急いで行つた。その中に一人……最も年若い美しいお清ちゃんも同行して居た。初夏とは雖、北國の空は曇り勝ちの給書を賣と衣更へる頃であつた。それでも彼女達は一里も歩かぬうちに汗でびつしよりとなつた程夏らしい氣分に満されて居た。お清ちゃんは老母の永い病ひの爲めに、この六十二年目の薬水を賣ひに出掛けたのであつた。そして午下の頃、その小さい目的の村に着いた。連れの女達と一緒に貴い水を持參の瓶に詰めて歸路に就いた一行からお清ちゃんの美しい姿は見失はれた。それは全く偶然であつて水賣の謎であつた。そしてその薬水はその年に限つて夏も盛りの七月の末斷然と止まつて仕舞つた。そして彼女は水の精に誘惑されたのであらうといふ噂が、巷から街へと傳へられて行つた。そしてお清ちゃんの老母は永い病から救はれて謎のやうに癒えて行つた。然し美しいお清ちゃんの姿はとうとうその街から今に歸らぬ數の一人である。

街の古老に云はしむれば、次の六十二年目に飄然として歸つて来るであらうと、これが今に傳へられてる話である。

大朝鮮主義

小野久太郎

朝鮮は今尙建設時代である、建設時代なるが故に中央政府より補助され、非募債主義の内閣にても相當の公債を發行するものである、併し母國が天運と共に窮りなき國柄だからとて、何時までも建設時代と稱して親の腰をテリで甘んずることは出来ぬ、「朝鮮をトクして呉れるか」と叫ぶ期間にも限りあり、在韓人としては速に建設を完了することに努めねばならぬ。産米増殖、交通整備、治山治水、凡て建設の手段なる以上之が實行は促進せねばならぬ。以上論ずる處頗る平凡であるが、此の平凡の實行が何等容易ならず、而も其の實行家は官となく民となく凡て岐路に迷ふて居る、在韓人の目標とするものは多く住んで居る都市を基礎とする建設である。従つて大京城、大釜山、大平壤など都市に大の字を附け加えることを以て建設の萬能と心得、未だ實て大朝鮮を唱へたものを知らぬ。在韓人が大京城、大釜山を力説せらるゝだけに大京城、大釜山は着々其形だけを建設しつつあるが、世界の朝鮮は實に尙懸懸極まり何時の日にか文化世界の朝鮮としての存在が認めらるゝか、想像することも出来ぬ。此の變態的朝鮮に大京城、大釜山の存在するは、恰も肥立の悪い赤兒が目ばかり大きくキョロつかせて居るが如きものである。或は又人間が疲勞困憊すると身體が如く際立ちて目が大きくなるものだが、四千年の歴史を有する朝鮮の現状は之に比するが至當かも知れぬ。斯く觀ずると大京城、大釜山等、グレート都市の建設を一顧して大朝鮮主義で推すべきものでなからうか。

總督府の廳舎は現代文化の精髓を誇り、今代の阿房宮として白玉山麓に聳立して居るが、之が果して朝鮮建設と何の關係があらうか、今や京城市内にはカフェーと云ふものが濫設され、化粧品を濫用する麗性の女が日一日白首を増しつつある、お化粧品能く、之が朝鮮建設の一大錯誤でなからうか、財政不如意だからとて朝鮮が建設されないものでない、建設は彫刻に比することが出来る、金がなくて本當の彫刻が出来ねば荒削りに止めてもよい。未だにしても「現代世界の朝鮮」と云ふ形が現はれば、未だで満足してよからう、ロダンや左甚五郎の手願があれば荒削りでも女は女、猫は猫と衆人に信せらるゝ名作も出来るものだ、今の朝鮮建設は此の荒削りによるの外はない、鐵道を敷かんすれば外車や停車場のお化粧を後にして一哩でも多くレールを延ばすべし、教育を普及するならば校舎のお化粧を後廻しにして一人でも多く教ゆべし、一家に極端なお化粧がなければ如何に家計が豊になるかを思へば、文化政治にお化粧を去れば必ずや朝鮮建設は急速に進まん。大京城、大釜山の建設の如き「世界の朝鮮」を建設する上から觀れば只不經濟なるお化粧に過ぎぬ、而も此のお化粧から朝鮮の盛衰が芽齧えて收拾し難き結果を齎しつつあるではなからうか、大の字を附けるが建設の目標なれば全國全韓、一齊に大朝鮮を目標とすべし、私は之を大朝鮮主義と稱する。

い善であるというやうなことも意

未だいものである、カントが所

善と悪

武井秀吉

京

城

雑

筆

人は遙かに理想を目標として理想を廻らし、行動を爲す、而して其れが凝つて學問、藝術、道徳、宗教となり、さては政治、經濟、實業等の社會的活動となり、人類社會百花繚亂の活舞臺と化す。人生の舞臺には、美しい花も咲き、醜い花も咲く、又善い實も結び、悪い實も結ぶ。

善悪は理想を標準として人の想念や行爲を評價したもので、善とは理想に合致し、悪とは理想に背反することである。然れば善悪は相對的のもので、善は惡に對して非惡であり、惡は善に對して非善であり、絶對に善も、絶對の惡も人の世には現はれぬ。

若し善惡の絶對的姿があるならば、善とは理想が實現されて最早や實現すべき理想がないことであり、惡とは理想の實現が絶對に不可能なことであるから、其處には理想もなく従つて善惡もないことになる。又善惡といふ以上は人は善惡を爲し或は爲さない自由を持つことを理想して居る、若し善惡を爲す自由がないとすれば、善を爲せとか、惡を爲してはならぬとかいふことは無意味である。

善は求むべく惡は避くべきものである、一善の實行は理想への一步の前進であり、一惡の實行は理想から一步の逆進である、然れども惡が此の世に隻影をも止めない

ことがあると思はざ事實に反する惡のない世は善もない、善惡のない世には理想のない世であつて若しそれは理想が實現され盡したことであるならば、誠に無味寂寞な世であり、又若し理想の實現に絶望したことであるならば暗黒沈滞の世であり、何れにしても理想のない世は努力のない靜止の世であらねばならぬ。

孔子子は己の欲する所に従つて其の則を越えずといふやうなことをいはれて居るが、其れは刻苦修養に依つて善い品性を作り上げた結果であつて、決して惡のない世の中を禮讚したのではないのであらう。若し萬人がかゝる聖賢に達したならば、其處には則ともいふものがない善である、則とは善の標準であつて則に合はないものを理想して居る概念であるから、則のない世は理想のない世であつて人生でない、況して品性其れ自身も絶えず向上進歩すべきものであつて、決して或る地點に定着すべきものではない、孔子子は聖人ではあるが、恐らく死ぬる迄其の理想に向つて品性の向上に努力されて居つたことであらう。

善惡は相對的のものであるから善は惡に依つて陰々其の光を發揮する道理であつて、眞に惡を知る人は眞に善を知る人ともいへる、かの悔ひ改められた惡は誠に美し

い善であるというやうなことも意味深いものである、カントが斯く爲されはならぬという義務の感じがなく、唯性向に隨つて慈善を施すことは道徳的價値を持たぬ、というやうなことをいつて居るのは、善い品性から自ら現はれる善行を除いては眞理であるやうに思はれる。普通の場合には放恣な欲情を感じるから節制の必要があり、恐ろしがるから知慧の必要があり、恐怖を感じるから勇氣の必要があり、利己心があるから愛他の必要があり、不公平があるから公正の必要がある、恐怖のない勇氣は畢竟が赤熱の火箸を觸むと同じく、又赤兒があやかす人に對して無心の微笑を與へるのは愛の表徴ではない。凡て修養の道に志す人は善い品性を作る修養の過程に於ては善を爲すことは一種の緊張の感に伴ひ、又努力を要するものであつて、生憎しい遊び仕事でないことを覺らなくてはならぬ。

◆新人の出馬

吉田 裝 一

◎通信局の學本さん、學校組合議員に當選する。本年三十三歳、花形中の花形であらう。

◎通信部内では、最もアタマの善い人として定評あり、加ふるに筆舌共に、暢達にして明快、斯ういふ新人が五六人も當選すれば、一講場も面目を一新する。

◎若田末彦さんは、豪傑醫者である。「先生、胃が悪うございます」「フーン、大飯を食ふからタイ」「どうしたら癒りませう」「二三日食べないタイ」患者求めざれば、決して藥を云爲さないのである。

棋客の意氣

將棋七段 溝呂木光治

▲新聞紙上に初めて將棋を掲載したのは萬朝報で、次は國民新聞であつた。對局は凡べて段削りでやり、今日の如く嚴格に四番手直りが實行されなかつた。之に就て面白い話がある。

▲今の石井六段が四段の時代に、故井上八段と對戦した。手合は勿論角落であつた。それで石井君が棒に四番勝つた。特に申合せなくとも將棋界の公則は四番手直りだから、今回は當然香角にすべきであつた。

▲處が、其後顔の合つた時、井上八段はすまして角落を指し始めた。本來、上手が負感して手駒が直れば、香番より指し始むべきものだが、石井君は香角の角番とても思つたのか、別時苦情も云はずにツン／＼指した。そして又勝つた。

▲すると又、二人の順番が廻つた。井上八段は矢張り角を引いて指し始めた。石井君は上目で井上氏の顔をツルリと見て、自分の顔をツルリと撫でた。只それだけで、強いて苦情も云はず、其儘指して又勝つた。

▲其後又、井上八段と石井四段の對局する日が來た。井上八段は例の通り角落で指さうとした。温厚な石井君は此時始めて云ひ出した。先生とは角落を六番勝つてゐます、今日は是非香落に願ひたいと處に云つて、例の顔をツルリと撫でた。

▲剛腹の井上八段も理の當然なるに服し、香落を指す事にした。當時井上八段は非常な元氣で、鋭鋒奮る可らず、大崎七段を初めとし、岡村五段、山本五段、宮松五段等の精銳が香落を負す事に腐心してゐたものであつた。石井四段

の香落は稍々格違ひの觀があり、豪勇の井上八段に對しては最初、手も足も出なかつた。

▲處が、どうしたものか、中盤以後後手のない事に於て鬼神の稱ある井上氏が一手見誤つて石井君が捨身の攻撃を受け損じたので見るうちに形勢が急變して、井上氏不利の局面となつた。

▲井上氏は黙つて長らく考へ込んだ。それが體に障つたものと見えて、瞬負血を起して卒倒した。對局はそれで中止し、後日指し續いたが勿論石井四段の勝ちとなつた。負け癖がつくと井上八段の如き名人でもどうする事も出来ないものらしい。

▲山北五段は當年三十六歳、力將棋の一風變つた棋士であるが、最近時事新報紙上に勇戦し寺田五段、小泉五段、山本六段の香落番を破りて五人目に大敵大崎八段と對戦する事となつた。大崎君は段削りから云へば香角だが、現今行かれて居る聯盟會の規則は、段位に拘らず前手合を繼續する事になつて居る、それに従ふと兩君は大崎君が七段時代に制日新聞、香落二番を指し其時山北君が負けなければト三番は残つて居るから香落を指すべきであつた。

▲然し、斯う云ふ事には感傷な大崎君は、前對局は古い事であるからとて、香角いつれなりとも指すと云つて其選擇を山北君にまかせた。

▲山北君は五人目の事だから、角落を指して貰ひたいのは山々だが、それでは聯盟會の規則に反くようでもあり、大崎君の好意を無にしたくなくもあり……五人目、規則、好意に對する感觸が三巴になつて山北君の頭を攪亂した。それで同君は暫く妙な顔をして居たが、遂に決し兼ねて、之を天運に問ひ、駒を振つて香角いつれでも出たのを指す事にした。

▲振つた駒は香が出た。是れでは山北君難戦だが、懸命の努力をして優勢の局面を出現した。そして戦は二日に亘つた。處が山北君武運揃く中盤から指し返されて負けた。然し彼の同志は彼が利に走らない意氣を壯とした。

龜子の出奔

善生永助

◇
天勝一座のスター龜子が、十一年間手壇に掛けて育て上げた養母であり恩師である天勝に背き、突然安東の興業光から出奔して京城の伯母妻貞子の許へ逃げて来たといふ新聞を見て、私はこれが一旅藝人たる魔術の女の出来事として、簡単に看過する譯には行かない気がする。私は朝鮮人に対して深い同情を持つ者であるが、是までに友人知日達が朝鮮人を世話して、後で裏切られた多くの實例を知つて居るので、龜子の忘恩の行爲は、それが同人の自由意志でありとしても、また倅で縁を曳く者のあつての企てとするも、何となくそれが朝鮮人に共通した民族性の露滴であるやうに思はれなければならない。野呂氏夫妻が龜子をあれだけ仕込んだ苦心は想像に餘りあらう。また龜子の親達も屢々無心を吹き掛けたことも天勝の言ふ通りであつたを信ぜられるが、恩を施さざれば懐くものと信じ、一本立が出来やうになれば逃げるといふことに氣付かなかつたのは野呂氏夫妻の不覺で、手品の人心觀破術では朝鮮人の心理は讀めなものと見える。

◇
これと一寸似た話であるが、私の友人松浦源郎は獨力を以て、東京で鶴林莊と稱する朝鮮人労働者の

の收容所を經營し、大震災後、東京府から委託を受けて中野に廣大なる寄宿舎を建て、多數の朝鮮人労働者を苦學生を宿泊せしめ、また仕事口の世話などをして、その維持經營に非常なる苦心を拂つて居る。ところが或る日、收容中の苦學生全部が結束して、その持主であり經營者である松浦夫妻に對し『先生夫妻は宜しく此所を退去し、鶴林莊の經營は一切吾々に譲渡すべし、然る上は吾々は自治を以て理想的の維持をして行く』といふ意味の決議を爲して密迫したさうである。勿論これに松浦が應ずる譯はない、多年生命を打ち込んで築き上げた事業を、斯かる無頼漢によつて、根こそぎに持つて行かれるやうな男でない彼は、直ちに對策を講じて追つ拂つたと見給へ。しかしそれにしても朝鮮人を能く理解して居る彼にして尙且つ飼ひ犬に手を噛まれ『朝鮮の労働者はさうでもないが、苦學生にはもう驚りくた』と熱く述懐して居るのを見て、朝鮮人の世話は並大抵の骨の折れ方ではないと思ふ。

◇
頻々として起る朝鮮の學校生徒のストライキは、吾々に何物を暗示するであらう、内地人の教育者に嚮望の足らぬ點もないとは云へぬが師に背くを庇とも思はぬやう

な青年の將來こそ、實に怖るべきものであるまいか。宣川平壤京城大邱等で、近頃基督教信者の鮮人が、外人宣教師を彈劾排斥するところが流行して居るが、我國に對しては多少厄介な點もあつたが、外人宣教師が、朝鮮人の教化に發揮した過去の功績は非常なものである。それに対して『餘のわけなつたらぬ用はない』といふやうな所謂信者の態度こそ吾々の再思三考すべき點である。つい先頃の公職者大會には、鮮人側から、普通學校の教員は全部朝鮮人を採用せよといふ提案をした者がある。決議では全部を成るべく多數と改められたが、この調子では遠からず『官吏は全部朝鮮人を採用せよ』といふやうな建議が出る時代が、來ぬとは限るまいと思ふ。

◇
朝鮮の政治史、外交史が黨争と裏切りに終始して居ると見るのは強ち私一個の僻見ではあるまい。近い年朝米葉の國際關係のみを觀察しても、甲國から乙國に、乙國から丙國にと、賣女の客を代へる如くに動いて居るではないか。さればと云つて、朝鮮の民族性を目して、直ちに裏切を事とし、妄恩を恥とせざるもののみは斷じ難いが、朝鮮の世話を爲すに就いては、その國民の心理をよく研究して、百年十年の將來を審議してすべての施設をせねばならぬと信ずる。現に朝鮮人は約二千萬人近くの大人口を有して居る上に、それが年々約十三四萬人増加して居るのである。國家は天勝一座や鶴林莊の如きものでないから、この大民族の性質を理解せずして、生温い世話のみをして居たら遂には磨を嚙むの悔みを胎す真れがある

出版界無駄日

島崎未平

◎出ること、出ること、此頃の新刊書、曰く何々全集、曰く何々大系、曰く何々叢書、曰く何々讀本と豫約集などで新聞紙は大分紙面を塞いで居る、殊に科學熱の勃興、古典熱の隆盛から頗る眞面目な讀むに堪える本も少くはない、喜ばしい現象であるには違ひない、が中にはそらと言ひ難い本も無いではない、彼の關東大震災で紙型を焼失して復興版と稱して賣出して居るのは正直でよいが、何の斷はりもなく（勿論序文にも）全然震災前とは別の書名を附けて、最新刊として廣告し、内容に一字一句の増訂すら爲した形跡の見えぬ題本もある。尤もかゝるためしは今に始まつたことではなく、徳川時代の浮世草紙や洒落本などにも知らぬ間に改題して賣置めたものもあつてゐる。讀書子は新聞廣告などで新刊本と思つて購へば、以前に買つて讀んだのと全く同一で馬鹿を見る事がある。

◎所謂雜物の新刊も中々盛んである、誠に結構な事ではあるが『本書書木版本は、今や市價三四十圓に騰し……箱入天金總タロース製類美本定價金五圓』などという廣告の本を買つて馬鹿を見る事がある。

◎出版せられる良書の多くは、やがて時代と古本屋とが掛つて絶版本にしてしまひ、數倍の價をつけて、しこたま讀書子の懐を榨り上げる、是れ止むを得ない事實ではあるが、古本屋の目録を見ると良書にもあらざるもの迄が絶版本として法外な價がつけてあるのには驚く。

◎一體全集といふのは、或著者の著作全部を網羅した、所謂エムブリオトワークスの事で、論文に書簡、傳記をも加へ、年表、解題、參考書目、索引等まで附けたものであるべきに、近頃我國では變つた全集が澤山出版せられる、聊か滑稽にも思はれるのは目下盛んに述作中の未だ若し新作家などの○○全集である此先きとだけ著作を出すか分りもせぬうちから全集など稱して出版するのはどんなつもりか解せぬことだ。つまり人の全集を生きて居るうちに出す人もあるのに、讀書子が求む間待つて居る故大家の全集の未だ出ないものもある『子規全集』の如きはやつと讀書子が待ち疲れた二十年後の今日漸く完成を見たのは結構な事であるが、上田敏博士の全集などもとくに出てよい筈である。

私達と犬

柄澤四郎

×
似た者夫婦と言ふ言葉で、私達夫婦にあてはまる一つとして二人とも犬好きな事である。「好き」と言ふ言葉よりも「寧ろ犬が居た方が良いネ」と言つたものであるかも知れぬ。

京城に居を構へてからでも随分澤山犬を飼つた、而もそれが次から次と盗まれる。妻が曰く「京城で随分犬を飼つたが、盗まれてもすまぬ」金三圓也の番犬税を拂つても犬を盗まれる程度に於て變りない。今の犬だつて三四代前の犬の番犬税のまゝで税を拂つて居るそれも盗まれる時に、鑑札だけでも置いて行つてくれれば文句はないが、どうせ察む程の人だから、そんな事に遠慮會禮のあらう筈はない。盗んで来た犬、盗んで来た鑑札で、ケロリとして居させれば、天下晴れての飼犬となる譯、居りもせぬ犬の爲に税金拂ふ人こそ馬鹿らしい話ではある。

×
好きだからと言つて、格別に可愛がる譯でもなく、夫婦同様に肉食主義を強制され、亭主が餘り好かぬ爲に肉の香りさへかぐことは稀である。が然し遠くから私達の姿を見れば尻尾を振つて駆け寄ることは忘れぬ。

「今日は好い天気ですネ、犬を洗つてやりませうか」と妻の發議

に、無聊に苦しんで居るまゝに早速と覺成して犬洗ひをやることにする。洗濯盤一杯、お隣りの家主さんから風呂の残り湯を貰つて来て、私が犬をつかまへ役、妻が洗ひ役、ワン全も恒例になつて居るだけに觀念してか、温和しく満身シャボンの泡に包まれて居る。蚤の居るな所を妻がまるで親の隣でも討つ様に、鶴の子は、しでゴシくやり出すと、目をむつていゝ氣になつて居る。傍で聲發衆助手を承はる家主さんの細君が「きつといゝ氣持なのヨ」

×
或る晩、近所の中學生さんが「お叔母さん……この犬を貰はない……」と飛込んで来た。「そろ有難う置いて頂戴ヨ」と不見識で貰つたのが今の犬である。

名前が無くては不便だから何とか命名しなくちやならないが、さりとてイザ名前となると好いのもみつからぬまゝに、先代の名前を其儘襲踏して「パール」と附けた。其文「パール」は、何でも犬を貰つて来た當座、こちらでもない、あつてもないと思案に餘つた揚句の果、新聞にあつた化粧品廣告で目についたパールを其の儘に拜借して附けた名前である。

×

此の頃は朝寢の私が起きる頃、そのパール先生はもうお外出で、犬の巢はカラ登であり、歸宅しても居ない。然し與へられた一定の食器に、朝晩やる飯だけは綺麗にたべてある。

「どうしたんだ、パールが始終居ないぢやないか……」

「居ないことはありませんヨ、さつき迄居たんですから……」

私が歸宅して洋服を脱ぐ時に、夫婦の間にこんな會話がかはされる。要するにパール先生は昨今犬の交尾期で、而も牡であるから戀を語らふ可く毎夜の外出、午前十時過ぎになつて歸つては前晩の不眠を補ふ爲に、午後三時頃までは己が真を覺込んで出掛ける譯と判つた。庭を掃いて居る妻が

「毎晩どこへ行つた……夜居なくちや犬の役にたかないぢやないか」

と叱り乍らほろきで犬の巢を崩りに叩いて居る。

「よせヨ、犬だつて動物の本能だから仕方ないヨ」とたしなめてはみるもの、毎夜飼犬の居ないことは、私にとつても寂しいことである。

——六、二百年後——

◆人のらわさ

吉田 莊一

中島長作氏といふと、辯論士といふイカメしい言葉を有つて居るので、初老近い人とはかりキメ込んでみると、岩に風らんや、當年やつと二十六歳といふわかさに、スツカリ肚臍を扱かれる。▲非常に讀書家で、おまけに事件研究に白熱的興味を有つてゐるから、氏の著作生活は前濠洋々といへやう。

藝術家の心

山田新一

A 盲目のドガ

盲目のドガは不自由な夜に廻つて、羅浮街のとあるキヤフェーへ入つた。

聲では、若きルソワルやマネエと、虹のやうな畫論を講はせた。そのあたりである。

今は、巴里畫壇に名聲並びなきドガではあつたが、その永き苦闘と辛酸の代償としては、餘りにも過酷な、老と盲目とであつた。

燃ゆるやうな創作慾！
だが全く視覚を失つた彼の肉眼！

せめて一杯のポルトに自分の心を慰めやうとするドガではあつた。

だが、誰も彼のテーブルに近く氣配はなかつた。
『給仕！、給仕！』

ドガは潰れた兩眼を見開いて、二聲、三聲大聲した。

だが然し誰も来ない。
刺さる、あちこちにタス／＼と溢み笑ひの聲がするばかり……。

敏感な盲目の藝術家の心が一瞬に囚はれた。衰へた盲目の自らと身に纏着られた（だが何物にも代へ難く愛用してゐる）畫筆用仕事服のことを考へた。

ドガは席を起つた。見ざる眼は美聲の在所を察めた。

激しく室内を一種嚴肅な空氣に於いて充たした。

ドガは數枚の金貨を卓子の上に投げつけて叫んだ。

『フランスのドガを知らないか！』と……。

だがその聲は怒よりは、不思議と人の心を動かす涙に滲つてゐる。給仕達も、お客達も、頭を垂垂れた。

ドガは杖にすがりながら靜かに出て行つた。

B 若きミケルアンゼロ

一五〇二年、今は世界美術史の本陽である。吾がミケルアンゼロが、今まさに完成せんとしつゝある巨大な大理石像『ダビッド』を仰ぎ見ながら、醫持つ手を暫し休めてゐた。

丁度その時、彼の仕事を來たのが、時の權門とエル・ソテリニであつた。

さて、暫くこの『ダビッド』に見惚れて居たソテリニは、さも眞大な過失を發見したかのやうに、尊大らしく、責めかゝるやうに云つた。

『ミケルアンゼロ君、どうもこの『ダビッド』は鼻が大層大き過ぎはしないかね……！』

其處でミケルアンゼロは、梯子を掛け鑿と少量の大理石の砂とを

握つた鑿、そろくど昇つて行つた。そして靜かに鑿を叩かしながら、掌の中の砂を少しづつ落した。併し彼は細心の注意を拂つて、決してその鼻には觸れなかつた。

『どうです、さあ御覽下さい』
彼は上から、ソテリニを顧みて云つた。

『成る程、今度はすつかり氣に入つた。君は大理石に生命を與へた』

とソテリニは答へた。ミケルアンゼロは微笑し乍ら、しづくと梯子を降りた。

南伊太利の八月の本陽が、さんさんと、やがては世界の文化史を左右するこの二十六歳の青年の秀でた額の邊りに輝いてゐた。

『ダビッド』は、今も、向フロレンスの國民美術館にあつて、若きミケルアンゼロの大理石の持たを無言の裏に傳へてゐます。

C ポール・ゴーガンの悲しみ

後期印象派完成の三大藝術家の一人ポール・ゴーガンは、晩年巴里の文明を極端に厭ひ、唯一人遠く南洋の孤島タヒチに逃避生活を送りました。

妻子にも別れて、或時は毒蟲に喰はれて、數ヶ月を斷業の手も全く及ばない、椰子の葉蔭の掘立小屋に悶々の情を忍ばなければならなかつた。彼の最期位、私達の悲しみを誘ふものはありません。

二月に一度か、三月に一度の便船によつて、はるかに運ばれる本國からの手紙（主として彼の親友マニエルからの）と、彼の畫布を賑はす、原始其儘の自然とが彼の唯一の慰めでした。

然かしこの手紙さへが、或時は彼の偉大な悲哀を更に深くするは

かりでした。それは彼の佛蘭西に殘して來た家族達の感々不遇なこ

私の母と同じやうに、彼女をアライタと呼んでゐた。

そして私の涙は彼女の花だ、涙の露は生きてゐる。

かりでした。それは彼の佛蘭西に
 殘して来た家族達の感々不遇なこ
 とを傳へるばかりでなく、ついに
 彼の愛蔵の死をさへ傳へました。
 ダニエルへの返事が一等雜辭に
 そうした彼の心を物語つてゐます
 『親愛なるダニエル兄、
 私は娘を失つた今、もう神を信
 じやうとは思はない。

私の母と同じやうに、彼女をブ
 リイヌと呼んでゐた。
 私達は皆それぐの心で愛した
 そして彼女の墓は花と一緒にあ
 るのか知ら。
 それはたゞ幻影なのか知れない
 が、彼女の墓は此處にある私の
 すぐ側にある。

そして私の涙は彼女の花だ、涙
 の露は生きてゐる。

君の親しい

ポール・ゴガンより

◆自由庵の記

雜筆記考

◎先月の第一日曜に、青葉町の
 丘の中にある橋本賢太郎氏のお住
 ゐを訪ね、一日を愉快に遊ばして
 もらつた。

◎京城にもあつた閑雅な丘、
 展望のいい高地、清静な樹林につ
 くまれた住宅地があるのかと、今
 さら驚いた次第である。

◎大正十二年に建てたといふ
 和洋折衷のお住、小さつぱりと
 して實に氣持がいい。

◎殊に南向の一間廊下に、ボー
 ルを傾けて、遙かに薄雲山方面を
 望む眺望は、何ともいへない。

◎宅地二千餘坪、園藝好きな橋
 本さんは、そのひろくとした所
 へ、草花や、野菜や、いろいろの
 ものを作つて、晩飯にはその勞作
 の結實ばかりで、めづらしい料理
 の馳走をする。

◎僕は、橋本さんの心境が、殊
 に尊いと思ふ。みづからよく年輩
 や天分を知り、その分に安住して
 つまらぬ非難などは起さず、しづ
 かに天と自然とを楽しむ。これは
 實に尊いことであると思ふ。

◎同席したのは高橋草之助氏や
 本間技師などであつたが、就中高
 橋氏は、『これは實にうらやまし
 い』と、心から感嘆してゐたやう
 だ。

◎門を辭したのは、午前二時近
 いころ、小提灯をさげて山道を下
 つて来るのも、趣味があるし、新
 聞包みの『ワサビ大根』も、無二
 の家つとである。

客室の夕

小水眞二

甲『藝壇教員の素質問題とかが大分やかましかつた
 様でしたね』

乙『つまらぬことですね、あんな事で決議とやら聲
 明とやらいつて騒ぐなんて、其れこそ素質が疑は
 れるわけです。實際人格ある素質のよい教育者
 はその市井に瓦石のようにあるものじやないのだ
 からね』

甲『實際そうですよ』

乙『あんな問題を起すのも、彼等が自分自身を満足
 する力が足らなかつた結果ですね、人間はもつと
 深く自分を省察する力がなくてははいけません』

甲『そうですね人間生活に於いては各自が常に自分の
 過去の世界を反省しつゝ、將來の理想に進むのでな
 けりや嘘ですね』

乙『つまり自己の野心を満足せしめんとする輩に
 は反省の世界がないのだね、反省の世界をもたな
 い人間に理想の世界があるわけではない、只だ其處
 にあるものは阿修羅の世界だけだからね、時に御
 子さんはどちらの學校へ』

甲『三坂の方へ……』

初夏の夕客室にこんな會話が聞えてゐた。

帳記雑

脇 鐵 一

京

城

雜

筆

埃まれの雑記帳——洋服のかげから、そつとのぞいた人の世の出来ことを、氣まぐれに寫したつた雑記帳である。讀みかへして見るほどに、おもしろき節々もあまたあれど、根が化石のことなれば筆には傾とゆかりがない。聊かく位が關の山なれど、まよと強て強氣に出て、これからは諸君の仲間に入れていたうとせらう。

一 雄 辯

二十歳あまり三つ四つといへばまさに人生の花である。風ふけば靡く尾花もあたら時代であるに、強姦致傷とは餘りに無粋な被告ではある。法廷が開かれる、被告がひき入れられる。驚いた、これはまた珍しい非道い踐行である。顔と體とに弛緩と硬直とが錯交して時々剛い経緯までも起すやうである。一寸見にも尋常の者とは思へないしろもの。此の被告が十六歳になる娘をさ……人は若い、時は春だ、怪しむにもあたなまい。事案が事案だけに訊問のメスは犀利であるが、肝心の本人は一面向に平氣の平太「モラリヨ」と傾狂な聲を空響いて退ける、本力が合はねば火花も散らぬ。

どこからともなく鼻唄が聞えて来る。嚴肅なるべき法廷に於てである。見れば被告の牽んだ口もとが誠に従つて動いてゆく。鼻唄の

主はまこと被告である。憐れむべき白痴であることに疑ふ餘地はなかつた。白痴ではあれど詭ぶ鼻唄には無粋な裁判官をもうつとりとさきる巧さがあった。端廷肅としてこの佳客の低吟に耳を傾けた、唄は通譯されなかつた故に歌詞はもとよりわからずよしもなかつた雄辯！鼻唄の雄辯！

被告は心身喪失者として無罪の言渡をうけた、げに鼻唄は被告を救つた雄辯な辯論であつたことになる。

○
脚つた傷事致死事件の被告はから辯論を結んだ。

「例へば三歳の童子が箱にて一張羅の衣服を泥まみれにして泣いてゐると想像していたときたい全く私は夢にも思はなかつたことをしてしまつたのです。慈愛深い裁判官議公上此の上このいたいけな子供を叱らない様にお願ひがいたしたうございます」

短い辯論ではあるが被告の氣持はよく讀める。朝鮮人は内地人より確に雄辯である。

○
老人の勤ついでに今一つ、場所は江原道の山奥、人は七十八歳といふ老人である、筋はざつとかうである。

此の世の塵ひ出にとでも思つたか七十八のこの老人は若い人妻に

【一六】

戀した。性根をうち込んでのねがひに半年ほどはともかくも讀みを通して來たらしい、勿論長くはつづから管がない。亭主も盲人ではない、女もやつぱり若い亭主の方がいい。老人は諦めねばならなかつたのだが流石に千金の玉を養ふ思ひ、この老人も今は戀の苦がさに決心の膽をきめて、女と女の家とを灰にしよう、或る眞夜中の二時といふに一里ほどの山さかを辿つて女の家についた。途中は虎の襲撃にそなへるため隠すまじした儘までも用意を怠らなかつた。火は須臾にして彼の女の家を燒き盡したが、女は少々の怪我をしただけで、辛くも遭れる事が能た。恐ろしい被告である、檢事は被告が老人な故に懲役五年を求刑した。

『この老人を牢屋に送つてどうしますぞ』

被告はから言放つてカラ／＼と笑つて引下つた、運氣味の悪い雄辯である。

◇吃驚敗亡記

山口 登

この間續銀檢査課に行くと、課長の阿部さんがニコ／＼して「君、よいとこ來た、いゝ人を紹介する」何をするかと見てみると、次席の人を引ッ張り出して、「御兩君互に名刺を交換し、今後ねんごろに交り給へ」そこで、双方名刺を交換すると、これは意外、どちらも同姓同名「山口登」である。「これは奇遇！」と大笑ひ。聞く所によると、僕でないこの山口氏は、ツイこの間まで光州とかの次席だった人、一ツわが山口姓のために將來、頭取までも擡ぎつけて貰ひたい。

米官有林であつたが「昨年我社に

郭公を聴く

橋本豊太郎

頃は鼻月の未つ方、青葉繁れる
 奥山に杜鵑啼かばやと指して行
 く手は黄濤濱、新緑驛を右に取り
 山又巖を打ち越へて急げは程なく
 彦安の邑に着きぬ。此處は郡廳所
 在地とは云ひ乍ら所謂農村遊邑に
 て内地人僅かに十數戸、學校はあ
 れども生徒僅かに三名とは驚ろ同
 情の感に堪へなかつた。最近同地
 より平塚まで自動車を通すること
 になつたのは交通上の一大福音で
 ある。借て彦安の一夜は如何に、
 勿論期待せし事をから堅き湯突の
 上に薄い蒲團を布き、重い掛夜具
 の摩苦しさに賛画かなりと申し
 にくい、ちとくして居る内に月
 が出たと見ても窓の外は明るい、
 オヤーと聲は月が鳴いたかと怪し
 んだか三聲三聲續いて五聲まで、
 『ツッペンカクタカ』とはつきり
 名乗り其の餘韻はキョーキョーと
 二た聲して裏山の此の木より彼の
 木に移り又もき鳴き渡る聲の夜の
 静寂を破つて遊子の感興をそよつ
 たのは全く思ひ懸けなき天籟の福
 音であつた。實は正直に白狀する
 が僕は未だ會て杜鵑の聲を聞いた
 ことが無いので、此夜其の初聲を
 耳にした時は若しや夢ではないか
 と自ら疑つた程であつたが、翌朝
 宿の主人に此處に杜鵑が居るか
 と尋ねたれば瀨山居るとの答へに初
 めて安心すると同時に、都の人は
 温かい蒲團の中に圓かなる夢を結

んでも此の風流韻事を解する人は
 定めし少からぶと思ふと、先刻ま
 で重かりし夜具が急に軽くなつた
 心地した。

翌朝は彦安から更に其の山奥に
 踏み入るので、馬を備つて買ひた
 いと頼んでも此の邑内には一匹も
 無いとのことで、己むなく平塚街
 道の社會といふ處まで自動車に乗
 つて其處から馬上の客となつた。

此の日郡廳から學務係の人一名
 を案内者として同行せしめられた
 ので道すがら四方山の話に旅情を
 慰めたが、途中楠亭里といふ所に
 有名なる採金銅鑛所を見た。其の
 規模の宏大なるに鑑みても全盛時
 が偲ばれるが、今は殆んど廢礦の
 姿で僅かに殘滓の整理精練によつ
 て命脈を存して居る。三里程來た
 所で構帯の擲飯を嚙り目的地の坪
 院に着いて早速公立普通學校を訪
 ひ、豫て同校の基本財産造成の爲
 め我社の所有せる山林の一部譲渡
 の要求に對し實地檢分の任務を果
 すべく、學校職員及面長を案内者
 として程近き馬頭山の視察に赴き
 其の要求を満足せしむべき取計の
 をして再び坪院里に戻り、學校長
 の舎宅に投宿して一夜の安眠を負
 つたが、曉近く雀の軒端に轉つる
 頭又々杜鵑の聲を聞いた。

同村の前に屹立する文時山は元

來官有林であつたが一昨年我が社に
 拂下げられ、之に一萬尺縮め以上
 の立木(樺、樺類)があると云ふ
 ので其れを視察したいのが今度旅
 行の主なる目的の一であつた。成
 る程此の山には珍らしい結構蒼た
 る密林が成長し、馬上遙に之を望
 見しつゝ清流に沿ふて道を通んだ
 鈴の音シャソク、此の日旅友な
 く朝鮮語キーラの爲めに馬丁と語
 ることが出來ず、只だ谷間に轉る
 鷹を友としてホークキョと口笛を
 鳴らせば彼の近く來鳴くもほら
 しかつた、やがてお聲頭取道を上
 りかゝつた時突然『ツッペンカク
 タカ』の一聲に驚かされた。杜鵑
 は月にこそ啼かぬ眞晝間に鳴くと
 は想ひ到らなんだ、まさか馬士の
 居眠りにはあらざりき、現こそ又
 新しき經驗を得た、其の日は谷山
 邑内に一泊したが同地には不思議
 にも同縣人五六名の在住するあり
 て一夕打寄り故郷を談じたのは大
 に旅情を慰めた、其の翌日新築郡
 に至り苗圃及植林の狀況を視察し
 たが、此途すがら又幾度か杜鵑の
 聲に耳を澄ました。

左に數首の歌句を録するのは白
 ら宗匠を以て任するのではなく、
 此人な詰らぬものを雑誌に載せ得
 らるゝならば我と思はん面々の續
 々投稿せらるゝであらふと思つた
 からである。

月離ろつゝに聞くや杜鵑
 曉に名残をつくる時鳥
 天邊を翔けたと鳴くか郭公
 鶯と杜鵑との啼き合せ
 ほととぎす啼くや樽聲の漣舟
 杜鵑待の夜を詩句に明しけり
 月や出でぬ山郭公鳴きにけり
 牛鳴いて夕日は夢の礎に赤し
 夢の礎に波打たせけり當風

文化の塔

大村百藏

今を距ること五十萬年の昔、即ち第二氷河時代から第一間氷河時代にかけて、ピラカントロプス・エレクトゥス(直立したる猿人と云ふ意)と呼ばれて居る類人猿族が、初めて地球の表面に出現した。それから約十萬年許りを經過して即ち第三氷河時代から第二間氷河時代にかけて更に別種の類人族が現はれた。其遺骨が獨逸、イタルベルト附近、地十八十呎の地層から發見された因縁によりて、ハイデルベルヒ人と呼ばれて居るのがそれである。以上二つの類人族は既に其時代に於て極めて簡単な石斧や棍棒などを使用して居たが、骨格の構造及び頭蓋骨の發達土台などに徴して充分に證據立てられるので、勿論普通の猿族ではなかつたけれど、さりとて真正の人類でもなかつたらしい。何れにしても吾々人類の直系祖先ではないと云ふ結論に就ては、學問上もはや議論の餘地のない處じやと聞いて居る。

この兩種族の最後はどなたのものか、彼等が生息して居た第二間氷河時代以後の地層からは、それらしい遺骨の一片も發見されぬところである、恐らく全部滅亡したのかも知れぬ。ハイデルベルヒ人より二十萬年の間隔を置ひて第三氷河時代——今より約十萬年前の地層から又な更に新しい種族の遺骨が發見された。此新種族は學者によりて曙人とも原人とも命名されて居る。曙人原人は前に出現した直立猿人やハイデルベルヒ人よりはモツと進歩した石器を使用し、既に火を用ゆるとも知つて居り、

同類の死體を埋葬したる遺跡をも發見されたと云ふ位であるから、一層吾々人類に近く、吾々人類の如く幼稚なる集團生活を營んで居たやうにも思はるゝけれど、これまた吾々真正人類の直系祖先ではなく、今から二萬五千年乃至四萬年前、即ち第四氷河時代が其頂點を通り越して氣候が次第に溫暖に向ひつゝあつた頃に、如何なる原因によるのであるかを族すべて絶滅したものと推定される。

專問學者の所説を綜合して、吾々真正人類の直系祖先は、今より約二萬五千年乃至五萬年前即ち地質學上最も新しい時代に屬する新生代の後期に、南部亞細亞及び北部亞弗利加地方から、其頃ろまだ陸地であつた地中海方面に出現したホモ・サビエンス(伶俐な人と云ふ意)と云ふ名で呼ばれて居る種族がそれである、とする推定に同意せねばならぬ。此種族は大別してクロアニヨン人とグリマルヂ人との二種に分つて出来る。其頭蓋骨や頸部の構造等から判斷してクロアニヨン人は亞細亞人に近く、グリマルヂ人は亞弗利加の黑人に似て居るとの處である。以上學者の所説を轉呑みにして、吾々人類の祖先——ホモ・サビエンスが初めて地球の表面に出現した年代を、繼かに三四萬年前の新生代の後期にありとすれば、一體人間と云ふ生物は地表に生息して居る他の生物よりは遙かに後輩であり、最新發のものであつたのである。

地球の年齢に關しては随分異説がある、わけ天文學者と地質學者の計算には非常なる距離がある。併し吾々が持合せて居る知識では何れが正しい計算であるかと云ふとさへも斷定がつかぬ。茲では取敢えずリツプマン氏の立てた假説を借用して、十億年乃至二十億年として置かう。最初は瓦斯の星雲から回轉し凝結して地球が出来、竟に今日の世界を現出するまでには驚くべき創造を見せた。されど其工程は總體が

應募 京城府歌

作者 寺田鐵五郎

- 一、國の鎮めと乾坤を
 支えて建てる南山の
 ゆるぎ動かぬ宮柱の
 み國をしるす光の
 天燈りの山ゆ漏れ出づる
 あゝま戴の京城府
- 二、國のなかななる國と謂ふ
 鷲の林に名著るき
 李朝榮華の跡と三つ
 歴史を偲ぶ遺跡に
 山河明るく御笑める
 あゝ美はしの京城府
- 三、泥地に儼建設の
 辛酸ここに幾星霜
 文化の礎今成りて
 生氣若し溢れつゝ
 日に日に光る都府の榮
 あゝ光榮の京城府
- 四、民かす今や四十萬
 八君遠く勢並み
 道も狭にする人の海
 夜はまぶしき灯の世
 家ごとに繁きなりはひに
 あゝ賑はしの京城府
- 五、聖代の恵みの露享くる
 國はら擧げて十三道
 國の中なる都府として
 咲くや木の花魁けて
 八千手に騰放つべき
 あゝ使命事き京城府
- 六、光榮の歴史を身にしめて
 都の光輝かせ
 意氣に摩するはらからの
 奉公の任さるとき
 誰か使命に燃えさるむ
 あゝ頼もしの京城府

つかめほと緩慢であつた。地質學者が毎日用ひて居る原生片麻岩とか洗滌岩とか云ふ言葉は、まるで一瞬時の間に起る何物かの推移を表現する言葉の如く極めて無難作に聽へるけれど、原生片麻岩が出来て其次に洗滌岩が出来、無生岩が出来て其次に初生岩が出来た順序と筋道を考へて見ると、餘りに其時間の長久であつたとに驚かされる。

○
 地殼が漸次冷却すると共に、初めて地表に生命の現象を見た。原始細胞が他の天體から散らされて來たか、自然に湧ひたかは千古の謎である。永ひ年代の間水中のみに生息するとを得た二葉虫やワラジ蟲のやうな下等生物や、海藻のやうな無顯花植物が、いろいろに變形し、いろいろに進化し、或者は水陸兩棲を始め、或者は陸上に侵入し、竟に今日の動物をまで發達するには随分と氣の永ひ作工を要したとであらう。地球それ自體としては素より澤山な創造をやつた。それが爲には又な随分長ひ歲月を要した。それで居て時々恐ろしい火山脈の活動や、地殼の變動などが隨所に繰返へさるゝのは、其造作が今尚ほ完成されて居ないとも見られる。

○
 億兆無窮年の宇宙の年齢は論外として、人間から見れば地球は驚くべき長命者であると共に馬鹿に氣の永ひ、悠長な性格の持主である。地球に比べると吾々人類の歴史などと云つて見た處で、ほんの一瞬時にも足りないほど其れほど短い年代の過程に過ぎぬ。されどそれは地球に比較して言つた言葉であつて、吾々がもつて居る歴史の觀念から見たならば、人類創設以後三四萬年に亘る歲月は、決して短ひ過程ではなく寧ろ悠遠の過去とも觀し得らるゝのである。然り悠遠の過去、此間に於て吾々人類の個性がどれ程改造されたるか、而して社會的にどれ程優秀なる文化が創造され建立されたるか。

(一五、六、五日)

昔の小噺

今村 軒

御色氣のある所をホンの三リ
ツトル計り、伺ひ上げます。

▼クワイの立腹

鼻越の松に船板場、婆や一匹
と猫一人……間違つた。時々頷
るゝ爪弾の音也。

レコとやらんは

ヤニサガリ

一號とかは

デレツイテ

替もど甘美なる陶酔のサイン
酔酌の取り膳に、密鴉の香り。

二人はホンノリと櫻色

一號は着で挟んで鶏卵計りを
勘める。

レコは、嫉妬をくれるとのた
もぶ。

一號は「くわゐは誰だと云ふ
からお止しなさいよ」と止める
鍋の中のくわゐ、腹を立て、

「何んデ、俺よりテメいの
方が余ッ程偉だ」

▼臭ひ試験

料理屋の奥坐敷、特に其目的
で造られた坐敷。あたりはシ
ーンと仕て居る。

男と女と二人きり。

二人は立つては居ない、坐は
つても居ない。

〇〇△△××□□◇◇●●……

と云ふ、六つかしい、ヤヤコシ
イ幾何學の研究中。

折柄響く、鐵砲の音一發、富
士の裾野のあたりから、陰に籠
りて、

『今の……聞こえて』

『……………』

『本と云に言つて頂だい、聞
こへたでしょう』

『ツン聞けた……』と鼻をし
かめる。

『愛想がつきて？』

『……………』

『あれは木……貴方の實意を
試験したのよ……あんな事で
愛想をつかすようでは、木の
見込がないわよ……』

『大丈夫だよ……』

『頼もしいわ……膽力が弱は
つて居るわネ』

折柄又もや二發、續いて一發
霰の香は物に具に立ちこる。

『コレく……大丈夫と言
つて居るのに……お前は疑ひ
深いよ』

月夜鴉がアホー、アホー。

▼野ガン

秋の夜、殊しき野原の小道
を行く、男一人り。

弓削なにかしに似た顔の中央
部の特徴、抑も何のシンボル？
臆病風に誘はれて、どくく
として歩む。

後ろから、人の追かけて来る
よぶな草履の足音。

「悪はそよぐ、月は雲に入
りかける。

小路の追分に、石地藏がボツ
ネンと建つて、其庭かけが夜風
に動く。

何處かで、コーン、コーンと
狐の猿鳴が聞こえて来る。

やがて追つ付けて来た、人は
と見れば、是れは又意外！

年齢十八九の一人のシャン！
トテモ、ステキな。

『淋しいから一所にいつて頂
だい』

案外馴れくしい。
すれぐになつて歩行く。

手と手との密談！
一塊りの黒き影は道を外れる

一獲ら茂る芒から招かれて夜露
は深い。

再び現れた時の女の顔は、
一層の妖味を増して、臆病男を

見上げた。
ゾッした……「ヘテ馴だ？

餘りに無難作に……。事による
と狐かも知れん……俺れは欺さ

れて居るんだ？」と男は腹の中
でつぶやいた。

だれゆげに、女の片手を握く
圓んで、聲に力を入れて

『コリヤッ……貴様は狐だろ
う？』

女の方はシャンくとして、
案外平氣に、

『あなたの方が馬よ！』

昔の小噺

今 村 鞆

御色気のある所をホンの三リ
ツトル計り、伺ひ上げます。

▼クワイの立腹

見越の松に船板敷、婆や一匹
と猫一人……間違つた。時々頭
るゝ爪弾の音色。

レコとやらんは

ヤニサガリ

二號とかは

デレツイテ

婆と甘美なる陶酔のシオン
酔酌の取り勝に、寄鍋の香り。

二人はホンノリと、櫻色。

二號は着て挟んで鶏卵計りを
勤める。

レコは、姑蘇をくれるとのた
もふ。

二號は「くわんは誰だと云ふ
からお止しなさいよ」と止める
鍋の中のくわん、腹を立て、

「何んデ、俺よりテメイの
方が余ッ程誰だ」

▼臭ひ試験

料理屋の奥生敷、時に其目的
で造られた坐敷。あたりはシ
オンと仕て居る。

男と女と二人きり。

二人は立つては居ない、坐は
つても居ない。

○△△××□◇●……
と云ふ、六つかしい、ヤヤコシ
イ幾何學の研究中。

折柄響く、鐵砲の音一發、富
士の裾野のあたりから、陰に響
りて、

『今の……呻こけて』

『……………』

『本と云に言つて頂だい、聞
こへたでしよう』

『ウン聞けた……』と鼻をし
かめる。

『愛想がつかせて？』

『……………』

『あれはネ……貴方の實意を
試験したのよ……あんな事で

愛想をつかすようでは、木の
見込みがないわよ……』

『大丈夫だよ……』

『頼もしいわ……腕力が弱は
つて居るわネ』

折柄又もや二發、續いて一發
霽筒の香は物に真に立ちこもる。

『コレく……大丈夫だと言
つて居るのに……お前は疑ひ

深いよ』
月夜籠がアホー、アホー。

▼野ガニ

秋の夜の、淋しき野原の小道
を行く、男一人り。

目前なにかしに似た顔の中央
部の特徴、抑も何のシンボル？
臆病風に誘はれて、ビク／＼
として歩む。

後ろから、人の追かけて来る
よぶな草履の足音。

「徳はそよ／＼、月は雲に入
りかける。

小路の追分に、石地蔵がボツ
ネンと建つて、其庭かけが夜風
に動く。

何處かで、ゴーン、ゴーンと
狐の透鳴が聞こえて来る。

やがて追つ付けて来た人は
と見れば、是れは又意外！

年譜十八九の一人のシャン！
トテモ、ステキな。

『淋しいから一所にいつて頂
だい』

案外馴れ／＼しい。
すれ／＼になつて歩行く。

手と手との密談！
一塊りの黒き影は道を外れる

一叢ら茂る處から招かれて夜露
は深い。

再び現はれた時の女の顔は、
一層の妖味を増して、臆病男を

見上げた。
ゾッした……「ハテ變だ？

餘りに無難作に……。事による
と狐かも知れん……俺れは欺さ

れて居るんだ？」と男は腹の中
でつぶやいた。

だしめけに、女の片手を掴む
顔んで、聲に力を入れて

『コレヤツ……貴様は狐だろ
が？』

女の方はシャン／＼として
案外平氣に。

『あなたの方が悪よ！』

おぼえ帳

松島 亮二

悪夢

お客を誘つてあと、ウイスキー機嫌で、隠接室のソファに横たはると、言葉の淡い匂に酔をそべられて、ツイとろくろと睡りにおちた、すると――

恐ろしい火焔を吐いて、巨蛇が僕の足下に、迫つて来るのに気がついた。突發！毒氣！毒氣！いふべからざるあることの……に襲はれて、聲もたて得ず、思はずしりごみした。唯ならぬ氣配に、次の望にみた青年、それは屈強の男であつたが、醫師の大手術を受けてあと、體力も、氣力も未だ充分快復してゐないのが、僕の危急を救はうといふよりは、寧ろ血氣の男にかられて、ヤニワにとびこんで来て、その大蛇と闘つた、かなり長い間、必死の奮闘を續けて、随分敵をやましたが、流石強敵なものと、自分の體力の足りないのとで、終に血に染みて倒れやうとした。その瞬間、我に復つた僕、隠接に來た家族総掛りで、懸命の大活動を以て、幸なして魔物を退治するを得た。サア、傷いた青年を介抱してみると、ナカク重態で、一同悲嘆にくれてゐると――

夕御飯に起こすものがあるのぞ、覺めてみればその青年であつた。傷のあまり、お膳の上で、件の

夢物語をしたところが、妻のいふのは、近頃、朝鮮での、出来ごとの何物かと、風示せられてはるますまいかと、いはれて見ると、何だかそんな氣持がしないでもない。

京城雜感

近頃街に、メッキリ殖えたのはカフエであらう、町々の表通りに異彩を放つてゐる。明治時の如きは、實に、カフエ通り之感がある、あれを裏通りの、回順泰空家へでも、纏めて見たらトウたらや。

黄金町とは、光臨門外へ遷搬する、再議の通はる邊筋にあたることから、名づけられたとはワソかホソワか。骨董屋が多い町だけれども、油も臭くて、ひやかさない。

光臨門といへば、市街地唯一の發展方面なのに、門外一帯は不衛生極まる汚物捨場で、おまけに焼場まである。その川下が市民の毎日口にする、蔬菜の本場であらうとは。

知名の旅館、料理屋に自動車の這入るのが一軒もないとは、今更ながら残念だ。初めて來る人々が旅館料理屋から與へられるその土地の感じ程、強く且つ深いものはない、ワソのやうで、全くその通りだ。

一杯喰ふ話

吉田 莊一

◎仁川穀物協會の太平さんが、東京へ行つて、ヒトイ目に遭つたといふ近ごろの珍話。

◎或る晩、守屋氏などと飯食ひに新橋へ行く。文千代といふ人物が、ツク／＼太平さんを眺めて、「旦那は、朝鮮のかたわね」といふ。太平さん酸っぱい顔して「ナニ、朝鮮だつて、何んで、俺が朝鮮かい？」文千代大きく、派手に笑つて「でも、旦那のネクタイ、濟物浦情調がたつぷりヨ、お里は争へないことよ。」

◎一夜あけると、傳屋が贈物を宿へ届けに來る。あけて見ると、ハイカットたネクタイ二筋。新橋文千代よりとしてある。善良な〇さんヒトク感歎して「ア、ウ流石は東京だね、行届いてみやがる。」

◎守屋氏に會つて、このことを話すと、「フムお安くはないね、今夜おこれ……」「サア、おこつてもいい、やつにも違つて、一口禮をいふか……」晩景相携へて、數寄屋橋をいそぐ。

◎文千代をしらして、大に感謝の意を表する。

◎翌日はおだちといふので、昨晩の勘定書をとつて、フト見るとハテナ……、これはおかし。元來文千代が自發的に自分におくつてくれたネクタイ二筋。それがどうだ、〇さんの勘定の中に記入されて、麗々と請求されてゐる。

◎も一ツ、ハテナと目をこすつてよく考えると、〇さんの勘定でネクタイを買ひ、それを〇さんに贈つて、られしがらせて、一晩おそばれたことがハッキリわかる。「フーム、さては一杯……」〇さん胸を組んで「喰されたか」

境 遇

穂積眞六郎

釜山から新義州に轉任したとき逢ふ人毎に『随分端から端に動いたものだ』と謂はれたものでした。成程税關は水際立つて、内陸には背を向けての仕事ですから、釜山の襤褸から南方の春の様な海を眺め暮した身が、いきなり廻れ右をして、國境の氷の河にびたりと登添つて北直したときには、自分ながら『極端』と云ふ文字通りの變化を面白く感したのです。

何かの本に『唐と大和の邂逅』と云ふ文句があります。其『ちくらが沖』とか云ふ處は、いづれ九州邊にでもあるのでしようが、國境に来て毎日黃海の潮が河水と混して滔々と洗れるのを見て居ると、鴨綠江こそ昔の文句を其儘に唱はるべき處などとも想はれました。

嚴冬の頃、集つた若い人達との間にこんな話が始りました。

『まったく面白いですよ。寒いことは寒いけれど、氷の上におつと屈むで居ると對岸からサク／＼と音を立て、渡つて来る……ソラ来たなど緊張すると寒いことなど忘れてしまいます。然し一晩中立つて居ても一人も来ない時なぞ、まったく腹が立ちます。早く来ればよいと待遠しくつて』

『それも君密輸入が無くなればいゝんだか、殖えればいゝんだか解からなくなるじかないか……』こんな高言振つたことを云つて笑ひながら私は、幼い時から父の書齋で見馴れた『刑は刑無きを期する』と云ふ實味の額のことなどを考へました。

『ソリア、夫れに達しないんですけれど、現場もあんな氣になれないんですからネ、まー一度やつて御覧なさい』

この一度やつて御覧なさい、が嵩じてとう／＼其冬の一番寒い晩、私も若い人達と一所に非常警戒に出て見ることになりました。

有名な鐵橋の上流下流に涉つて警戒線を布いてから、もう幾時間か立ちます。何しろ安東の隊拂さへ手に探る様に聽える静けさで、配置箇所からチヨツとでも動けば、すぐ對岸に氣取られてしまうのですから、防警帽は息の爲に板の横に張り、眞鍮でくるむむ防寒靴まで履いた爪先が、雖も探まれる様に痛くなつても只々立盡して居るより外ないのです。

四時になつて安東發の貨物列車が、この寂寥を破つて鐵橋を通過したとき、私はハツとして我にかえりました……。この暗黒の中で一體今迄一生懸命に何を考へて居たのだらう、初めの中こそ様々なことを……然し其考は寒さの爲に次第に一臆に凝結して、今では……一人でもよいから早く来ればよいなあ……只これ丈でした。

鐵橋の側と氷の上、只これ丈の境遇の變化は、先程實しげに他人を笑つた私を、靜かな天地の何處からともなく聽えてくる聲の爲に、笑はれなければならぬものにしてしまいました。そして自分でも感々しうに暗の中で幸樂したことでした。

子煩悩の歌

工藤重雄

去年の六月、私は急遽哈爾濱に
向け旅立つた。旅の用事は茲に語
る必要も無い、世の爲め人の爲に
なれと心より祈つて志した事であ
つた。哈爾濱では身を粉にして他
念なく働いて、今一步で成説する
所であつたが、事志と違ひ、九奴
の功を笑に缺いて仕舞つた。窮
乏を忍び、苦痛を我慢したことは
顧みて我ながら涙ぐましい事はか
りである。拮据半歳の努力を泡に
して張郭戦が終を告げる時には、
私は雨溝を放浪して歩いた。喪家
の狗の如く、舊知舊友の門を叩い
て乞食した。機を見て再び哈爾濱
に引き返したいばかりに戀しい京
城には背を向けて居たのである。
世を忍ぶ袖乞ひの身分となつては
疎へても饑へても心は暇である。
詩歌は心静かなる時に湧き出るも
のを聞いて居たが、雨溝滞在の半
歳には和歌と名くれば名くべき、
俳句と稱すれば稱し得べきものが
不用意の間にホカリホカリと腦裡
に浮んで来た。浮んで来た時に手
帳でもあれば其の端に書き付けた
のが多少残つて居る。

私の妻子は今東京にドン底生活
をして居る。彼等は私の哈爾濱に
居る間も、雨溝に居る間も、一切
の苦痛を我慢して私の成功を祈つ
て、その希望を活力薬として雨溝
を渡り呼吸を續けて居てくれた。
私は辛勞すべき苦痛の中で、妻子

の苦痛を思ひ、之を諦めることが
最も苦痛であつた。故に妻子に對
する詩歌が最も多い。それ等を永
樂町人が出せ出せといふから、つ
い其の氣になつて原稿紙に一部を
寫し取つたのが左の數首である。
歌人ならぬ私は和歌の規則を知ら
ぬ、俳人ならぬ私は俳句の道を知
得ぬ。唯だ伴らざる心持ち、飾ら
ざる感情を述べた迄だ。

或る日雀の聲に目さめて、怒を
おけたら雪が積つて居た、雪の枝
には雀が居た。

雪の枝に肩すりよせて五六羽の
我子に似たる子雀の鳴く

雪の夜は寒い、寒い夜は特更子供
の事を思ふ。

今年迄は許せ我子と飯れ足袋
膝ら抱きしめて寝ろ兄弟

それが當しると、時々夜眠らなく
なる。

衣更さへせぬ子等を抱きしめ
てしのび泣く言にさむる夢かな
しるや子と思ひわびつゝ夜もす
がら眠りかたなの父のありとは
眠らないで夜を更かして居ると、
子の泣く聲が遠くに聞える。

我妻も我子もかくてあかすらぬ
乳なき稚児の夜をこめて泣く。

滿洲では何處に居てもすぐに子供
の友達になつた、友達になれば皆
自分の子の様に思つてならぬ。

五つ六つの子供集めて繪を書き
てはし淋しき身を忘れけり

紀元節の日だ、滿洲の田舎にも國
旗が軒並に立つて、小學校の子供
は元氣よく嬉しさに遊んで居る
年は幾つ苗字は如何に名は何に
と尋ねまほしき子供多かり

滿洲の雨は風を伴つて凄い、雨具
も持たぬ子が學校にぬれながら通
つて居る姿が眼に浮ぶ。

我子おし春の野風の強ければ雨
のあしたやぬれそほつらむ

留守の間に、私には子供が一人殖
へた、無論その子の顔は知らぬ、
風邪とやらの便りがあつた。

しのげく雪に折れるな今年竹
いさゝか寒いが、滿洲も春は春だ
祭の日には晴れ着着た子供の手を
ひく夫婦が多い。

高語で人は妻子を伴へどわれは
淋しくおほくとゆく

東京は花見時だ。

他家の子は花見衣に唄ふらぬ

思里妻子は戀しきもの、

しるや子と思ひわびつゝ夜もす
がら眠りかたなの父のありとは
わすれかね思ひあまりて今日も
また子の名妻の名書きて覺しつ
春の町そら歩きに子の手ひき
し此の手淋しくステッキを買ふ
眠られられない戀しい心、眠る
妻子の夢になれ

朝鮮に歸つたが、朝鮮にも妻子は
居らぬ。

憂き旅の旅物語り語れとや妻子
をおきて誰に語らむ

歸り来れば滿洲は戀しい、滿洲に
在る時走書に書いた學生の句に、

捉へ所無い程不氣味な海鼠かな
春風や馬賊悠悠と一と仕事

野や幾里馬車一つ見ゆ雪の中
あの家も我はらからよ日の御舞

手にのせて雲雀鳴かする胡人説
春雨や高粱のびぬ三寸

うなづいて柳のさらばくかな

わからぬ女

森 一 郎

京

城

雑

筆

◇

シールのコートの下から縫い師の重荷、細き織の安くない眞白い襟巻、髪は流行の行方不明、御化粧に充分の念が入つて居るので世三と見えたが五には必ず手が届いて居るらしく、眼と眉毛に一寸した魅力を漂はして居る。中型の洋装一つ、乗つたのが信川温泉驛、寒い十二月の末の終列車だ。

狭い二等室だが客は私と二人切り、暖爐の傍へ向ひ合つて、心易く話し懸けて来る。麗姿の私に獲物が一羽もない、話は賑から始つて汽車ののちい事に移り、最後に一週間滞在して居たと云ふ信川温泉に落ち付く。仲々快活な調子で、へだてがなく冗談を交えて退屈な列車の中を思はず忘れさせる處は仲々侮り難き手腕がある。

「奥さんかなあ……どうも違ふ……仲居かな……違ふ々々……商賣人ではなし……と云つて外妻でもなし……勿論娘ではない。大概の女性は三四十分の會話で見届けて了ぶ自信のある私だが、どうも見當つかない。もう本線に乗り換える沙里院へ卅分も経ては到着すると云ふのに、結構例者であると云ふ判断がつかない。何も夫れほど苦しんで判断をしなくてもよい間柄ではあるが、夫れでは私の好奇心が許さない。頻りと例の調子で一流のカマを懸けて、雑談中に

シヨウタイを突き止め様と焦るが仲々尻尾らしいスキも見せない。

丁度何かの調子で二人共反り返る聲笑ひかけた拍手に、列車が凍り付いた田の中に停つて俄に汽笛を鳴らし始めた。之れは冬中よくある例で、輕便機關車が寒氣のため凍つて、蒸氣が揚らなくなる爲めだ。支線に乗り馴れた私には珍らしくもない。其婦人きざして驚きもしなかつたが、暫くして腕に巻いた時計を眺めると、遽に蒸氣相な顔になつて、

「困りましたね、此處で停られては、間に合ふかしら」

私も思い出した様に時計を見ると、京城行乗換迄に二十八分切りない。順潮に列車が行つても沙里院迄二十分はかゝる地獄だ。

「さあ、あなたは北ですか、南へですか」

「私、南行きです、あなたね」

「私も……之れは少々怪しくなつた」

列車は仲々動き出さない、もう十三分切りなくなつて居る。でもどうやら動きそらな見込みが立たない。

「困りましたね、之れに乗り遅れると、夜中の二時迄待たなくてはなりません。此處ののに沙里院の宿なんかには寝て居られやしません」

五時十八分に沙里院に到着して

【三時】

四十何分に發車する京城行きに乗換える段取りになつて居る其外車が卅九分になつて居るのに未だ立往生をやつて居るのだ。

「沙里院で泊る位なら此處此れ車で信川に引返した方が幾らまししか知れせんわ」

婦人は既に觀念の請を壓めた様に慫慂云ふと、が車の方の心配をもう忘れて了つた様に、

「あなたどうです、あなたもさうなさいよ、八時半には信川へ着くんですから」

私は「いや」とも云はず「そろしましよう」とも答へず、唯笑つて其場を済して了つた。

◇

「ほれ御覧なさい、困つちましたね、とにかく、何處か宿迄御一緒に移りましよう」

漸く沙里院驛に到着したが乗換の間に合はぬので、婦人は再び引返しを誘ひ始めたが、今度は寒氣のため信川行きの終列車が覺束ないと云ふ。

ブツ／＼云ひながら二人は驛前の旅館に入つたが、二つの火鉢を抱えても痛み付ける様な醜態である。湯に入つて胸衣を二枚重ねて酒を燗んに飲み始めた。婦人がいける口で瞬く間に七八本の徳利を倒して、聊く人間らしい気分になつたが、私は早朝からの山の疲れで婦人の話相手がどうやら勤まりそぢない。

食事が終ると女中が寢床の準備に入つて来た。私は慫慂した場合相手の人に氣まづい思ひをさせたくないと思つて、前へ立つ風を見せて座敷を外すと、後に残つた婦人が別室なり、同室なり、氣儘に寢所を命し得るであらうと考へて居た。寢床を終つて階段を降りて

行く女中の足音を聞き届けて、私は座敷へ戻つて来ると、多少驚かざるを得ない。二つの末をピタリ

◇

「之れは少々氣遣きなわね、あなたの方ま丈夫夫」

にヒラリと乗ると、

「失禮しました、御免さへ」

婦人はサツサと歸つて了つて了

詩 仙 堂

大 阪 川 田 順

詩仙堂丈山が居間は黒ひたりすわり
て居れば暑し此の日は
詩仙堂の礎の上に寐ころびぬそとは
眞寔の昔葉なりけり
すね者の本山が事ばらるさげれど書
聲すらくはよき庵室なり
詩仙堂にわれ一人なり蜂の穴に出で
入る蜂を見つづ日永し
小蜂らは庭に穴掘りこの庵の内^外か
まはず飛びにけるかな
日晷とほくにすなり詩仙堂の柱にも
たれてわれは居眠る
西山の蒼空にして日晷しはらく鳴り
て止みにけるかな
あかねさす書をともれる佛の燈居眠
るわれの眼に映りつつ
寺庭の赤松に日はゆぶべなりひとね
わりして覺めにけるはず
庭の砂に穴掘る蜂のおこなひを見て
ぬしやがて吾は寐たるらむ

行く女中の足音を聞き留めて、私
は睡敷へ戻つて来ると、多少驚か
ざるを得ない。二つの床をヒタリ
と付けて並べ、其中共に炬燵が置
いてある。勿論かけ蒲團は別々で
あるが、炬燵の暖氣を逃かさぬ爲
めに、一枚の大蒲團を双方共通に
上からかけて置いてあつた。

双方勿論相當の年齢に達して居
る。道連れとは云ひながら、別に
氣にもして居ないらしい婦人の様
子を、私は先づ疑はざるを得なかつ
た。一寸立つた儘テした氣分で
其處に居る私に對して、

『さあ、さめぬ内に休ましまし
う、寒いから』

婦人は慍ふ云ふと、フワリと著
物を其處へ脱ぎ放して、長襪袴の
儘蒲團の中に潜り込んで了つた。

◇
『これは少々熱過ぎるわね、あ
なたの方は大丈夫』

慍ふ云つて共通の炬燵の上をク
イツと足を延して見たが、私の足
に突れが重なること、

『あら、何んて冷たい足なんで
す、冷えますの？』

驚いて私は足を引ひ込めたが、
婦人は平氣で、

『このがたつてものは、足が熱
いものです。あなたは女員
たいね、乾度、冷を性なんぞせ
う』

と平氣なものである。

◇
一時が来て私達は京城行きの方
車に乗つた。そして其朝の七時廿
分に京城驛に降りたが、驛前で俾

にヒラリと乗ると、
『失禮しました、御先さへ』

婦人はサツサと歸つて行つて了
つた。

慍を判らなくなつて了つた。
汽車の中で逢つて、話し合つて
……宿へ泊つて……炬燵の上で足
が觸れて……それ先けなら判つて
居る。

けれ共夫れ以外の出来事があつ
たのだ。勿論旅ひ先き……殊に酒
の上の醜異とも判らなかつたが、
私が男であり、向ふが女である以
上、私が卅四年の今日迄に有する
経験では、どうしても

『失禮、御先さへ』

と云つて平氣で行つて了つた婦人
の心が判らなかつた。事實の所男
である私が、その體置に『御先さ
へ』失禮出来得なかつたのだから
『成程こいつは判らない女だ』
私は今でも慍ふ思つて居る。

◇ 鮎が食へる

平田久雄

◎昔から漢江には、鮎はそだた
ぬといふ言ひ傳へがある。

◎で、京城の間間は、わざと
南嶺地方から鮎をとりよせて、い
さうか古いところを『この香氣が
何ともいへません』などとやつて
來たものだ。

◎殖銀の有賀頭取が、ソツと
一番最初に、鮎の卵をとりよせて
漢江に放つたのは四五年前。それ
から引きついで、毎年のやうに
十萬餘箇の卵を入れたが、河もと
うく根氣まけして、鮎は漢江に
立派にそだつことになつた。

◎昨年あたりから獲れ出したが
今年は殊に豐漁で、少し手際がい
ふ人は、三四時間の釣で、二十尾
ぐらゐは立派に獲つてゐる。

正誤かたく

山縣悌三郎

貴誌の前號に、自分が中里介山君をば、『文庫』の記者として用ひたやうに書いてあるのは間違ひであります。同君は寧ろ『文庫』に關係がなかつた。當時同君は『都新聞』の記者であつて、田川大吾郎君の下に働いて居られた。又同君の令妹が、自分の宅に居られたのは事實であるが、女中としてではなく、客分としてでありました。貴社の石川君は、多分自分が千葉江戶君の事を談したのを聞き誤られたのでありませう。千葉君は當時東京にて、非常なる困苦を忍びて勤學して居られた。自分は其の事をば小島水君より傳へ聞いて、早速『文庫』の編輯局に迎へたのであります。中里君といひ、千葉君といひ、其の人格識見及び向上進歩の努力に於て青年時代既に群を抜いて居られた。其の今日の名聲あるは決して偶然ではありません。然るに同君とも、今猶ほ當年の志を失はず、愈々其の學問と修養とに努めらるゝのは、自分の大に満足し、且敬服する所であります。

千葉君の近信にも次のやうな文句が見えます
 (前略) 私も相變らずの讀書慾と、それに何か書いて居りますにつけては、餘りに無知でもならぬので、どうしても、もつと勉強して何か少しは後にのこるやうなものでも出して置きませんと、貴下や故奥様に一方ならぬ御厚情をいたしたのに對して、甚だ申辭がないと思ふのも「勉強さざるから」との御話でこのたび『日々』と『毎日』との御厄介になる事にきめたわけの一つであります云々」

手筋の話

將棋八段 金易次郎

第一圖

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王

第二圖

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王
香	桂	銀	金	王	王	王	王	王

持駒 先後手なし 金桂

第二圖は矢張り實戰の場合に、屢々出来る形であります。先手方には手駒に金、金、桂があり、自陣は可なり荒れて居て、持久戦になれば不利益だが、敵方が二手を費さなければ、自主に詰みがない。つまり、此處で必死をかければ一手違ひで勝になると見て、三九金を打ちます。これを捨て、置くと、三八金寄、一八王、一七銀打同王三五桂打で王が上つても下つても詰みがあります。

然るに後手方には、前述の如く二手を費やさなければ、敵王に詰みがないから、何とかして自主の必死を防ぐか、脱出の方法を策するより外に手段がないのであるが、どうも防禦の方法がない。處が此の場合に後手方が四九銀と引くのが非常に善い手で、これが所謂『降棋の手筋』であります。即ち先手方が同金と取れば手駒に金、銀、桂が出来れば、さうなつては全く詰みがありません。即ち後手方は、銀を一枚だけ取らしたから、敵金を逆にしたから、最早自主に必死がなくなりました。ソコで今度は後手方から、敵王に必死をかけて、勝敗顛倒の結果になるのです。總じて對局中、駒の利きを逆にささるゝことは手筋の一種であつて、銀や香を敵角に取らせても、其の角が『ソッポ』に向つて、再び原位地に返らなければ、其の活用が不能に陥る。さればこんな場合ヲサと我が駒を犠牲にするのは、頗るいゝ手筋なのであります。鷹と實戰に就て御研究を願ひます。

婦十係發生するものとす、是れ婚烟の本旨にも違反せるものにして

續法律小話

中島長作

京

城

雜

筆

無銭飲食

刑法は他人を欺罔して財物を騙取する者を詐欺罪として處罰する。支拂の意味あれども囊中無銭にして而して娯亭に登り遊興し、飲食する者は無銭飲食として詐欺を以て處分さる。其徒は酒肆中庭の亂心者が遊興本能に反抗する能はざる意思無能力者にして不知不識内に之を取行し覺めて茫然たり。

家中財を貯へども支拂の意思なくして信用なる假面にて小賣店に電話して白米を食ひ、其支拂を爲さずして小賣商人を泣かしむ、此徒は初めより計畫して之を爲す、共に無銭飲食たるに差異なきに、是は單なる民事問題として掛け倒れとなるのみ。

囊中無銭にして而して旅舎に宿泊し、一夜の安眠を貪りたる者は無銭宿泊として詐欺を以て問はる。而して其徒は家を退はれ目的なき放浪の旅に登り、旅券所有を喪ひて故郷を望み、父を思ひ母を戀ひ、旅費に疲れたる憐むべき世の落伍者なり而して不知不識此の罪を犯す。

家中財を貯へども支拂の意思を有せず他人の家屋に借り住ひて其家賃を支拂はず、世の家主を泣かしめて快哉を呼ぶ、此の徒は初めよりは是を濫刺す、共に永續的無銭宿泊たるに差異なけれども、是は

單なる民事問題となるのみにして終局は踏み倒さる。

夢さ者よ、汝は永遠に夢さ哉。噫世の數多き是等の矛盾を如何にせん。

婚姻

婚姻とは共同生活を目的とする男女の社會的結合を謂ふ、蓋し人類の性的要求と種族保全とを其目的とする。されど婚姻は私通野合と其性質を異にし、社會的に公認され社會的に正義つけられたる男女干渉なり、婚姻の歴史は人類發祥と其軌を一につし、婚姻史は人類文明の程度と正比例して居る、其形式も各種の變遷を経たり、曰く掠奪婚、曰く賣買婚、曰く贈與婚、現在行はるものは共諾婚なり、其共諾に付きても本人の自由意思を尊重するもの、父母の共諾を要件とするもの、然れ共個人主義的思慮の旺盛なる現代に於ては、自由結婚の制度最も青年男女の吉唱する所となれり。我民法は婚姻は之を戸籍吏に届出づるにあらざれば其效力を生ぜずと規定せり、故に此届出手續を経るにあらざれば同棲數十年に及ぶも法律上夫婦たる取扱を受けず、所謂内縁十係に過ぎず。

故に單なる届出の形式のみ具備せば同様に及ばずとも夫は妻の全部を支配し得べき、誠に奇型的夫

婦十係發生するものとす、是れ婚姻の本旨にも違反せるものにして我民法上婚姻制度の一大缺陷なりと謂はるる所なり、現代の社會的要求と法律規定と相隔ること數里にして爲めに種々なる問題を惹起す。

大審院の如きは此内縁十係を婚姻濫約なりとし其不履行に因る損害賠償請求權を認め或は私生子認知訴訟にて内縁十係は女に有利なる法律解耦を興へる等、司法技術によりて幾分救済し來りたるも、法律の明文上根本問題は如何ともな才能はず、社會の要求に遠かること大なり、早晚届出主義は廢止され、真正なる婚姻十係は法律も認むることとなるべきものとす。

◆筆のしづく

平田久雄

漢城銀行の李淵雨さんは、どんなな多忙な時でも、イヤな朝一ツせず快く會つてくれる。この間も、畿内各地の人文風土に就て、いろ／＼面白い話を聞かされた上、ペンを執つて昔の人はこんな評語を加へてゐますといふ。

哀哉道 鏡中美人

忠清道 清風明月

全羅道 風動細柳

平安道 青山猛虎

慶尙道 海中孤岳

黃海道 清波投石

江原道 岩石老佛

咸鏡道 泥田鬪刺

そして「コ／＼わらひ乍ら「暇があつたら雑筆に、これに就ての小感を書きたいと思つてゐます。尤もこの短語には、言外にいろいろの餘情があるから、却つてへまな蛇足なんか加へない方がいゝかも知れませぬ……」

博覽會

思ひ出一つ

大山一夫

朝鮮新聞社主催の博覽會が京城で五月の十三日から開會された。僕は博覽會好きだし、殊にお蔭元の事ではあるし、今日迄に兩會場に度々足を運んだ。會期も十日間延長されたとのこと時間の許す限りは見物したいと考へてゐる。想必に入場人数が重なるにつれて印象が益々強くなるし、出展者の苦心も窺はれる。宣傳が利いたと見ると、鮮内の地方、内地及滿洲邊からも團體が續々入京した様子、殊に日曜などは場内頗る雜沓の體、雖に朝鮮社は所期の目的を達し大博覧の事を察する。常に朝鮮を愛する人々は自分で企てた様な氣分で共に其成功を誇つて居る。僕は其一人である。現在開かれてゐる博覽會對して思ひ出でなんかは、一寸も嫌だが、一二述べることにする。

それは花の四月……といつてもまだ櫻溪の花影が人目をひかない、たしか十七日頃と覺える府内初等公立學校長諸君と一緒に府の學務課から、博覽のこと、その教育館の一部に府内公立初等學校出品の相談を受けた。早速賛意を表し實行に入るべく七名の委員を全校長中よりあぐることになり、教育館(元の學務局)に充てられた會場に近しい御託言で、僕は委員長とつかれた。教育館の位置や初等部の室割すら知らない、其上に開會迄に三週間許りの日子しかない、費用も可成節約とのこと、一向に大體方針も立たぬし、内々頭を痛めた。しかし委員

の連中が多士濟々なので、不安な花と共に終りに散つた。委員會を開くこと數回、更に設備、圖表、陳列等の小委員を他の校長諸君に委嘱し各自分業で努力を拂つた結果、五月の十一日には曲りなりに陳列全部を了へ、開會一日前に準備はと引續いた。出來榮については種々批評もあつた、それは百も承知二百も合點、覺悟してゐる、がしかし愉快に感ずることは期日前に引渡した一事である。雜筆誌上をかりて委員の諸君に衷心敬意を表する。

次は大正四年秋麗陽宮内で開かれた、總督府始政五年共進會のことである。一體共進會と博覽會との區別は何によつてたつたものか、僕にはよくわからない、今回の博覽會と名づけてよいなら、あの共進會も始政五年博覽會と稱して別に支障ないと認める。あつたとき僕は京城府の學務に勤務して居た、丁度十一年前のことで記憶から段々にすらいだが、寺内總督が中央政界に乘出される前のことで、何でも随分力を入られたと噂されてゐた。今の總督府新廳舎のところに本館があつたし、講義館は光化門を入つて右に二番目の建物であつて、全鮮道別に産業の趨勢を善にせしむるところで、各道力癩はこゝに入つて居た。今の總督府博物館はその時の美術館で、黄金館は其當時の演藝館を移したものである。尙建物の一部は西大門小學校の手工室に移築使用されてゐる。

共進會開催のために市街の整理が取急いで行はれ、京城入門の一たる西大門は展攤はれ、西大門一、二丁目邊、竹添町一丁目並に長谷川町邊が現状の如く立派になつた。博覽建の京城郵便局も開會前に落成して、石造たる鮮銀の向ふを張つてぬつと陣取つた。地方から入京する學校生徒兒童の團體のためには教育俱樂部即今の修養團朝鮮聯合本部や、小學校普濟學校の教員室講堂等をその預相用に提供して費用の節約を企てたものである。餘談ではあるが、今の技藝

折々の歌

市山盛雄

漣の新芽伸びたりみどり葉を盛んに
 張りて道をせほめし
 うつし植ふし紅葉ひととわが庭の風
 趣をそべてうれしくなれり
 かりんの葉茂りてくれはおのつから木
 肌の皮のはけておつるも
 庭隅にころがりてある發動機兄のしわ
 ぞをみればやしき
 萬草も赤錆はてて一女にもならず朝を
 眼にふれ兄をにくむも
 大發明家めきて造りしこれの機軸むな
 しく庭に赤錆はてし

病院の坂のほりつづはがらかな鶴のな
 きこそ間近にきくも
 陽に映ゆる石造殿をあしらへる柳のあ
 を芽けぶらへりけり

ある時

わが病膏員に入れりひたすらに憂なし
 猿は歌にくらさむ
 憂なしは歌にくらさむすみてゆくこ
 ろをひとはよし知らずとも
 うつそみのかせきの葉も忘れはて葉に
 ちりけて暮したしいまは

學校を井上眞三君が引受け再興したのはその時
 である。湖崎氏と井上氏との間に京府府が肝煎
 りで完全に授受を了し、やつと懸念を聞いた。
 その當時の生徒数は百内外に過ぎなかつたが、
 今は驚く勿れ六百にも達し、まさしく十二年間
 に六倍の發達を遂げてゐる。借問す、實業の方
 面は果して幾倍に發展して居るか。



次は十九年前に開かれた京城博覽會、一名は
 日韓聯合博覽會のこと。これは明治四十年九月
 即ち伊藤洋行時代に開會されたので、會場には
 時の大東俱樂部今の黄金町二丁目東拓の東隣で
 貴族會館(一時高等準備校に使用されてた)を
 本館とし、李王職水官邸、其當時巨魁部博士が
 管理せられて居た陳列列場、及其附近の地を
 使用された。第一、二、三、四號の各陳列館及
 演藝場等も新築されてたようである。僕は海州
 から船で仁川に降り見物にと入京したが、何分
 十九年前のことであるし、其時の標子を明白に
 は記憶してゐない、當時の建物の一部が一時南
 大門小学校の教室兼講堂に移築使用されてゐた
 が、大正四年頃今の講堂兼雨天體操場(よく讀
 員選舉場)に利用されて昔縁にお馴染のものが新築
 される時取除かれて影を失つた。其外には思出
 として何にも語るべき材料の持合せのないのを
 遺憾とする。



抑々博覽會なるものは或時代に於ける人文の
 地位を知らしむる設備で、吾人は此設備により
 て現在いかなる地位にあるかを觀測し、併せて
 將來いかなる地位に進ませなければならぬかを
 考察しなければならぬ。斯る重大な任務を負ふ
 博覽會を朝新社が主催され、朝鮮産業開發に多
 大の貢獻をせられた點につき、聊か感謝の意を
 表する爲めに思出の一端を吐露した次第である
 この次の朝鮮博覽會は幾年先に開會されるか
 らして待選いことである。

(六月九日學組議員改選日記す)

讀 後 微 笑

笠 神 志 都 延

◆
 ストープの焚火の光の當るとし
 ろに丁度投げ出した、客の左の靴
 の内側の革に六ツのカスリきず、
 それはあたかも乾いた泥を削り取
 った跡のごとく見える。これをば
 チラリと見たシャイロツクホーム
 スは

『ねエ、ワットソン、君は近こ
 ろ田舎を旅行したね、そしてぬ
 かるみを歩いた、しかも君のう
 ちの女中はソツツカシ屋だ』
 と推斷したことがコナンドイルの
 探偵小説、スカンダル・イン・ボヘ
 ミアの中に出て居る。

◆
 エドガア・アラン・ポーがフライ
 デルファイアの新聞記者時代、マダ
 ム・ロージエの怪事件といふ小説
 を書いた。その頃ニューヨークで
 美人が殺され、ハドソン河に捨て
 られてあつた事件を題材として、
 まだ犯人があがらぬ前、巧みにそ
 のヤリロを想像したものであつた
 想像にしては現實そのものらしい
 ので、當時大いに讀書界の評判を
 取つた。アトで分つた犯人の自白
 によれば犯跡は全くポーの小説の
 通りですとあつたそうだ。

◆
 六月四日、東京府下田端在で死
 後二ヶ月を経過した二十歳見當の
 美人(推定)の絞殺屍體が發
 見された。警視廳はこれにつき極

力探査の結果次第の推定が立つた

一、女の着衣が長しゆばんにねま
 きをかさね、黒えりの半纏を着
 て居る。門窗一本に金冠がして
 ある。これはカフェーの女給か
 又は小料理店の女中であらう。

一、女の手髪は五寸位アツツリ切
 れて居る。これは男への心中立
 てか、男の戀に狂ふ刃に切られ
 たものであつて、戀の三角關係
 が原因らしい。

一、女は善足でそのへんに下駄が
 見えぬ、即ち絞殺は他所で行は
 れ、茲まで死體を運んで来て棄
 てたものであらう。果して然ら
 ば運搬具は自動車でなければな
 らぬ。

一、故に犯人は自動車の運転手であ
 る。

◆
 ある時代の樺府廳長が更迭して
 副廳長が昇任するだらうと推定さ
 れた後、予は現在の政府某大官を
 訪ふて問答をかされた。彼れは知
 らんくの一占張り取り付く島も
 ない。

『ぞぞ副廳長は?』
 『アン、それはいい後任があつ
 たそうだ』

これで用事はおしまひ。つまり
 副廳長後任の誰なるかは別として
 現副廳長昇任だけは明白になつた
 のである。

◆

【三〇】

アメリカの、ロツクフエラー研
 究所で、ある日本の學生が、一度
 使つたアルコールを、節約のた
 め廢物利用といふわけで、切々蒸
 溜して居たら先生がやつて来て

『使ひ古しはいかんね、新しい
 のを使ひ給へ、時間が大じだ』
 といつたそうだ。

◆
 徳川時代、幕府の財政は米によ
 つたのだから米價が上ると大に助
 かる。ソコで相場師をそそのかし
 て相場をあふつた。しかも餘りあ
 ぶり過ぎて米價暴騰、國民饑饉に
 陥する悲劇が或年起つた。むろん
 幕府は弊害があると見て直に米相
 場を禁止した。すると困つたのは
 六百人の仲買とその家族だ。早速
 連印して再認許可を江戸表へ陳情
 に及ぶ。頃は元禄年間、當高者が
 大岡越前守、くたんの陳情を薦と
 御吟味の上『これ意味深長なり』
 といつて許可の指令を下された。
 話はこれでおしまひだが、ただ分
 らぬのは、『これ意味深長なり』
 と元禄年間に越前守がいつたとい
 ふ點。

◆
 西鶴好色五人女巻五に、女色を
 ぶつと思ひ切り出家した鹿見島の
 住人源五兵衛入道、さすがに美童
 前髪は事はやめがたしと諸佛にお
 ことほり申した矢先、男變したお
 まん纏に戀の只中持つてまゐられ
 入道わけもなつたことある。ミ
 ダシは『僧はあちらこちらのちが
 ひ』。

◆
 枕をかはず……『かはず』とは
 交換するの、か、交替するの、か、は
 た交々するの、か。實種見聞といふ
 事も出来まいが、何とかその實相
 を究知したいもの。

美人(推定)の絞殺(屍)死體が発見された。警視廳はこれにつき極

のである。

事も出来まいが、何とかその真相を究知したいもの。

音

金谷要作

京

城

雑

筆

◎
 鐵手に依つて奏でられる微妙な音色は別として、あどけなしと一口にクサク給はず音響でも聴く人の心によつては又未々の趣を持つものである。唯一匹の猪せ娃が古池に飛び込んだ水の音がたま／＼佛堂の耳に入つたばかりに、正風興振の大波紋を轟くに至つたとかいふは今更野暮なこと。深夜に時を刻む時計のチクタクは不眠症患者には煩はしいものであるに相違ないが、幼子の心には伽の國へ旅立つ夢の驛鈴とも響くであらう

◎
 憂きことの多い世に生を享けてうら悲しき音はと問へば、涙を透るあさまなき、煎餅蒲團の中で車海老の如くに縋まつてうつら／＼して居る枕頭に、ゴウリゴウリ／＼と響き渡る女房が味啖する音とむ答へむ。げに女房が味啖する音は笠置落なる藤房卿の聞き給へる峰の松風に老響ふべき。

◎
 うら悲しき音は未だ懐しくもあるが、例の『闇の力』の二節にある嬰兒殺しの一場面、ニキータ『まあ、一ていあいつ等は何れやがつたか？おらを何といふ目にあはせやがつたか？あの赤ん坊の啼聲はどうか？……おらの足の下でぼき／＼と云つ

た音はどうか？あ／＼おらを何と云ふ目に合せやがつたか？……それにやつぱりまだ生きてるだ本當に生きてるだ！『沈黙、耳を澄ます』啼いてる……はら／＼啼いてる』(穴藏の方へ駆け出

つた)アトリヨナ『理めに行く積りだな。ニキータ、灯り見せよえかね』

ニキータ(答へず、穴藏の傍で耳を澄す)『聞えねる心の迷ひだべ(傍を離れ又立止る)あのおらの足の下で骨がぼき／＼と云つた音はどうか？ぼき／＼と、ぼき／＼と……』(米川正夫氏譯)

◎
 此のぼき／＼と云つては又何としな音が、眞黒闇に墮ち込んだ流石鐵道者の色男ニキータも、此のぼき／＼の爲に、人間の魂に異深く藏されて居る一點の光明を獨らに至つたのであるといふ。

◎
 初て觀つばい所では、衣つれの音は心ときめくなつかしき音色の一つであるが『木の音がくれのあの小座敷で、誰が鳴かすか籠子の帯』に至つては沙汰の限りに非ざるに、彼のぼき／＼と取て遠からずと、憎まれ口を叩きまゐらす(二五、六、四)

◇いろ／＼帖

平田久雄

◎近ごろ京城中も麻雀が大流行である。

◎西小門町の官舎などでは、小さい集りが幾つもある、土曜の晩などは、何處の家でも、麻雀をを樂しまれてゐる。

◎四人一組で、勝負の出来る麻雀は、二夫婦寄ればいゝので、大に陸まじぶりを發揮し、且つ箇中に樂むことが出来る。

◎麻雀は、非常に簡單なもので三三回やつて見ると、子供でもスグ覺える。碁や將棋のやうに男子だけの娛樂でないから、夜がふけても、細君が『あなた々夕十一時よ、もう二三度やりませうよ』と申すさうな。

◎この間も、西小門町の小さいつらとんで土木出張所長の本間さん第一等賞をせしめて『買品の煙草の味は、買った煙草の味よりは、六分好いやうだ。ワイ』

◎ついでこの間流行した蘇原、林の諸氏も、麻雀の差別賞が二等面白かつたぞ、ニコ／＼してゐた。

◎総督府會計課長の磯積さんにお目にかゝる。重厚にして眞率、さながら博士の、尊い佛を再びこの世に見るやうだ。非常に理解のある方で『僕もこれから折々寄稿しますよ』

◎小野氏の初老の會で、久しぶりで有賀氏對小杉氏の碁戦を參觀した。有賀さん輕騎を放つて、盛んに敵をいぢめる。小杉氏陰忍目重、お／＼と喰ひさがつて、黒の得を納めやうとする。蓋し京城碁壇では有賀の取組で、得るところ少くなかつた。

越中禪 (再)

奉天にて 廣江澤次郎

共喰は愚

支那三界迄踏出して日本人同志の囂中を興ひ、共喰は愚の骨頂だ日本商人の根底が支那で深く廣く伸びず、兎角動搖するは原因茲にありた、須らく吾人新らし味を有する實業家は、支那人と西洋人を顧客とし距離せざる可らず、と金儲けに餘計な理窟を付け、理想に走る私は貸家も紳然たる西洋人向にして、貸家契約書も素直の領収書も英文と云ふハイカラ振り！ 隨て支那人も出入頻繁だが、西洋人の知己も尠くない、大正十三年の九月頃と記憶する、某日懸意な西洋人R君が私の事務所を訪問し聲を密めて曰く

「前米國總領事にして現在〇〇顧問なる×××氏と武勳派の顧問〇〇氏との間に進行中の浦潮にある古物鑄鋼材約百萬圓買入問題は、大體の話は纏まり居るも×××氏が費て支那側より注文され、米國より輸入中の或機械が、運送途中誤つて上海に墜落され大問題突發、支那側に激怒され居り、鋼材問題は停頓し居るも、財政窮乏の懼東政府は其處分を急ぎ居る故、支那側の最も信頼する某々氏の方面より此件交渉を圖られたし、先方より特使を當地に呼寄せてもよし」

私は默考少時、西比利亞にある多額の古物鋼材を、支那側に賣る！米國人の鼻あかせをやつてや

る！大體の話は、既に打合せ済！コイツは面白い、此國際的大商賣を一番調査してやらうと、飛んだモーションを始めた、之れが特大越中禪に終るとは、聊かも知る由なかつた。

調査終了

私は直に各方面調査に着手し、大體左記を最も有力なる筋より確かめ得た。

- 一、各顧問は是非其國家の爲め本商談成立を望み居る事
- 二、支那側は絶対必需品買取欲望し居る事
- 三、露西亞側は至急買却し窮迫の財政補足希望し居る事
- 四、露西亞側は約百萬圓にて手打可能な事
- 五、支那側はA、B、C三點にて百七十五萬圓迄發給保證の事
- 六、支那側は本商談成立せば検査官を特派して材料品の検査に着手し、仲介人に責任を負はせざる事
- 七、検査官一應檢分し、オールライトと電報飛ばせば、支那側は直に半額を銀行信用狀發行する事
- 八、受渡場所は東部露支國境ボクラニチナヤにして、露領は露領軍官憲の輸送責任、支那領は一切支那責任と協定し得る事
- 九、ボクラニチナヤにて現品引渡後は、積半額八十七萬五千圓は哈爾濱又は奉天賣方側便宜の地にて支拂ふ事
- 十、賣方の希望によりは支那

側より汽船を浦潮迄送つてもよき事

愈々出馬

幾多の迂曲曲折はあつたが、賣方の特使も招致し懇談した、續續の這入る事を恐れたので商談確實に成立迄は一切秘藏申合せ、愈々本舞臺に乗込む事となつた、支那側は特派検査官の人物撰定済、私は茲迄双五の關係者を結び附けた事故、此邊でゴ象鼻り利益分配をシコタマ頂戴仕らうとした所が、關係者一同私に出馬を懇請して止まわ、支那側も是非有力な日本人が監督して錯誤のなき様にして呉れとの注文！何がさて仕事好きな私雇てられ、ばカナリ踏込んで仕事すると云ふ愚かな私、トウドウ検査官等と共に西比利亞三界迄泳ぎ出す事となつた。鐵路哈爾濱經田シクスノロの東支鐵道、荒れ果てた烏蘇里鐵道も突破し、難行苦行の西比利亞に飛込み、某地に落付いたのは、沿海州の荒海も堅氷に閉ざるゝ月の初めであつた。

残念至極

極端に人心善惡、單化のロス連中や赤役人と機組拮抗、東奔西走したが、結局題目通り越中禪に終つた。支那側も非常に残念かつた、關係者一同もガツカリした、赤の高級役人も私共の身分等を知悉し居り、踏込で斃旋盡力して呉れたが不成功に終つたのは誠に遺憾であつた。其後露西亞通の某々氏に此経緯を語したら、彼等曰く「比較的短時日の間に大金も徒費せずヨクマ赤の高級幹部と談判し其所迄やつたネ、ヨクマア無事で歸つて來れたネ！」私に取つても一生一代の無鐵砲勇の記録であつた、ソコで越中禪も此邊で筆を擱く。

京

城

雜

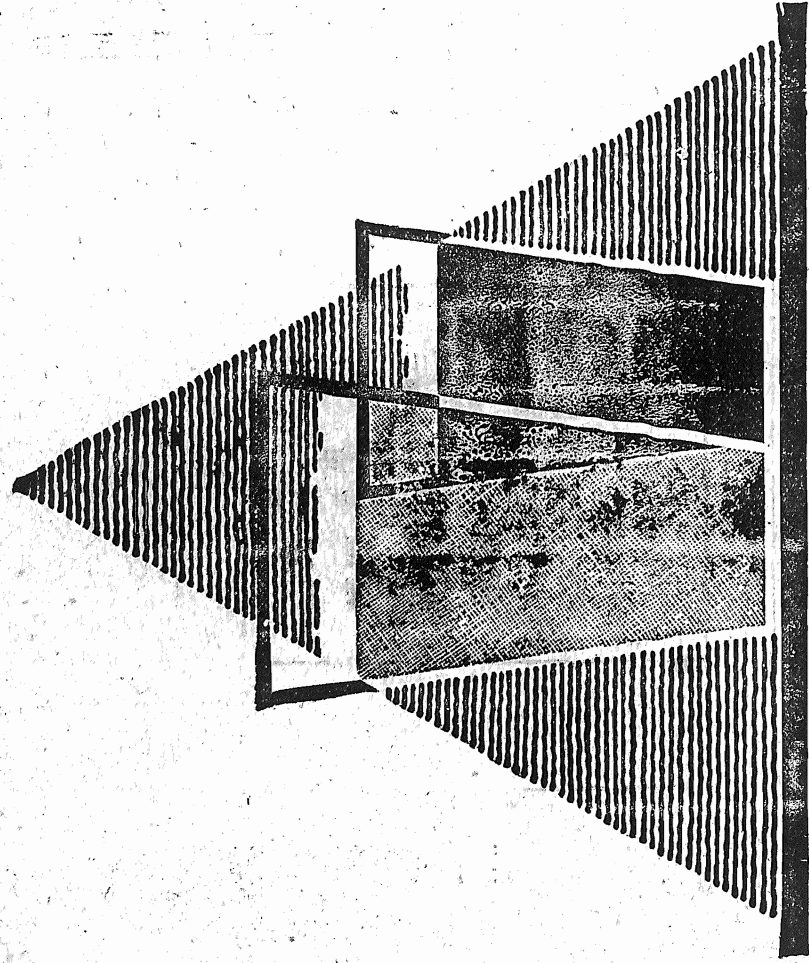
筆

殊に難者小冊 既に吾國にあり
多額の古物銅材料を、支那側に買
る！米國人の鼻あかせをやつてや

圖は哈爾濱又は奉天賣方側便
宜の地にて支辨ふ事
十、賣方の希望によりては支那

私に取つても一生二代の無鐵砲
猪勇の記録であつたソコで越中
輝も此邊で筆を擱く。

ルビアン



株式會社 明治屋 發賣

ルビアン

十唐八段主幹
月刊 **將棋新誌**
(一冊定價金三十七錢)
東京市橋區西紺屋町五
發行所 **將棋新誌社**

市内本藥町二丁目
本戸齒科醫院
院長 **本戸 虎藏**

西洋料理
支那料理
東京へお出の節はどうぞお立寄りください
東京支店 新樓田町一七
泰明軒

市内明治町二丁目
小兒科 **中島病院**
院長 **中島 貞信**

市内明治町二ノ七五
利根川齒科醫院
院長 **利根川 清治郎**

市内旭丁二丁目

外科 皮膚科 瀬戸病院

院長 瀬戸 潔

市内鐘路一丁目

濱 洋服店

電話 光化門二四四

人生の幸福は健康より

健康それは養精の服用によつて解決します
日と云わず今日から而して人生の幸に向つて

(定價内用二十五円五十銭)

京 城 本 町 二 丁 目

總 發 售 所
錦 州 街 元

貴 生 堂 藥 品 店

電 話 本 局 二 三 八

振 替 京 城 七 六 二

級 高 京 深

(新 規 具 本 到 考)

京 城 本 町 三 丁 目



ふ ら き 屋

電 本 三 〇 六 八

振 京 五 八 三

市内高野町一丁目

小 兒 科 木 村 醫 院

電 話 本 局 七 二 五

均質牛乳

牛乳界の大革命

日本最初の試み

均質牛乳の特徴は

脂肪を粉碎して均質します故に消化が宜しく風味の佳良と酸臭のない事は一度召上つた方には直覺せられます長らく腐敗しませぬから小児や病人の方々にはこの均質牛乳に限ります品質本位でありますから値段の競争をせないのは弊場の主義生命であります。

朝鮮總督府病院特等御用

陸軍衛戍病院御用

京城府内各病院御用

平 山 牧 場

電話光化門二三三番

京城東小門外

營養と性別

酒井一郎

營養と性別との間に一定の関係ある事は、植物、動物、特に高等動物に於ては殆んど疑ふ餘地のない事實である。種蜀の皆虫アロキセラとか、癩輪類のヒメテイナセンタ等では、營養の良い肥大せる卵から雌が出來、營養の悪い卵からは雄が出來る。又蜘蛛、テフツラ、輪虫、蜘蛛等でも同じく受精しても大卵からは常に雌、小卵からは常に雄が出來る。尚、雌雄兩生殖器を兼有するヒドラでは營養品を與へると雌性生殖器のみが著しく發育し、殆ど雌虫の觀を呈し、貧弱に飼養すると雌性生殖器のみ發達活動し雌虫の如くなる。蜘蛛では自然の状態で育てると四六%の雌が產生するの、牛肉で育てると七八%、魚肉では八一%、蛙肉では九二%迄も雌の出生率を昇し得る。蜜蜂でも仔虫に良食を與へると、働蜂となるべきものも女王となり、蜂虫でも暖き且つ營養品豊富なる晩春夏期には雌を生み、秋冷、初冬の營養品貧弱の期には雄を生む。蛙でも通常雌の産れるのは九〇%内外とされて居るが、營養分豊富なる場合には九〇%迄雌の出生を允める事が出來る。

同様の結果は植物界にも認められる。真菌類に於て胞子を營養缺乏の瘠地に降いた時は雌性扁平體のみ生じ營養の良給供に及んで雌性を生ずる事は認められて居る所である。以上の如く高等動物に於ては、營養の性別に及ぼす影響に就ては學界一般に認むる所であるが、高等動物にありても種々なる實驗が企てられてある。豊富な食料を與へ、營養をさせて置けば雌を多く産み、貧弱なる食餌を與へ、過勞させる時は雄を多く生む彼の常に雌を殆んど同數に産する羊でさへも同様の關係を生ずる。牧畜家では交尾期に母獸の營養を過血によりて取捨し、雌雄比を適りにし得ると云ふて居る。但し物好き小生もまた母の血を絞る事だけはよくし得ないで居る。之れが流行の隣にはさぞ藝者や舞妓が殖へ、鼻下鼻通が喜ぶ事であらう。人間に於ても貴食な富貴に女性多く生れ、其の日暮しの人民風情に男子多きは人の云ふ所である。乍然今日にありては人間に此の問題はまだ決定的とは云へぬ。宜しく今後の研究に待つべきである。五月號に於ける小生の茶食一年の裏面には此の意味も含まれて居るのである。即ち昨年四月より吾々夫妻は菜食により營養を停十二月受胎、本年九月の候出産する譯である。之れが對照動物として肉食愛好の城大徳光醫學博士夫妻を御願ひして居る次第である。季節と性別の關係も中々やかましい問題なるにより殆ど申合せた様に受胎時期も殆んど時差なき此の二組の間に行はるゝ實驗報告は必ずや本年中に京城雜筆を汚す事となるであらう。

人と公民

堂 本 貞 一

凡そ世の中に、ひんしゆくべき多くのことがあるが、其中の一つとして、露骨な煽動運動が擧げ得られると思ふ。露骨な煽動運動がひんしゆくされる因由も色々あるが、自ら己れを適材なり、良吏なりとして、因縁を辿り、纏邊に縁つて、其の地位を獲得しやうと焦る、その姿が嗤ぶべく、其の心なぞもしいと感ぜられる點は、其の重なるものと思はれる。

ところで、自惚れは困るけれども、自信の無いと云ふことも感ずべきことではない。此の點から考へて見ると、自ら己れを適材なり良吏なりとして自己推薦を爲すことも、あなたにひんしゆくすべきではない。否、場合に依つては大に賞揚すべきことであるかも知れぬ。しかし、どうも吾人の傳統的道義感の裏底には自己推薦を賤しむ情が潜んで居り、自信も過ぐれば自惚れとなることを考へさせられるのが常である。

進んで難局に當る。これは犠牲的精神の發露であり、公に殉せんとする崇高な行爲として尊敬される。然かも、此の事が単に公共心が旺盛であり、犠牲心が熾烈であるばかりで、能く爲し得るところではないのである。そこには一大自信と自尊との横はるものがなくては叶はぬのであつて、彼の補正成が「臣生きてあらざり」と

奉答して、大御心を安心し奉りたるが如き、「我れ死せば天下は尊氏の世」と叫んで正行に訓へたるが如き、實に一大自信の言ではないか。

斯様に、考へて見るとさふと、自己推薦なるものは人として、少し、わかり易く云へば、一箇人が自己だけの世界から見れば賤しむべき事であるが、公民として社會なり、國家なりの一員たる立場から見るときは、場合に依り大に推薦すべきことであるかに感ぜられる。すれば吾人は、人として生きて行くのと、公民として世に處して行くとの間に、特異なる正義感が必要であり、用意がなくてはならぬのであらうか。

ルツワーは『エミール』の中に「人を、その人の爲めに教育しないなら、他人に都合のよい教育しか出来ぬ。だから吾人は天性に抗してやるか、社會に逆つてやるか、人を導るか、公民を導るか、國者其の一を導らねばならぬ。自然そのままの人は自分の爲めに生存する。彼は數の單位であり、全體であつて、たゞ自己に頼り、自己の好みに應ずるばかりである。公民は分數的單位で、其の價値は社會組織といふ全體との關係で定まるものである。善良なる社會制度は人を不自然なものとなし、又人から絶對的存在を奪ひ取つて關

(三)

係的生活を興へ、吾といふものを公衆といふものの中に編み込んで了ふから、最卑人は自己を一個人として見る事が出来なくなり、全體の一部とか、公共生活とかいふより外に、自分のことはわからなくなる」と述べ、三百人の議員の一人に加はらうとしたが不幸落選し「スバルタには俺よりも偉い男が三百人居る」と云つて欣喜奮躍したスバルタペタレスを指して「彼は眞の國民であつた熱心なる眞の國民であつた」と稱し「闘場に臨んで、私慾と義務との板挟みになつてグズグズして居る奴は、自分の爲めにも不必要だし、人の爲めにも不必要だ。こんな奴は人でもなければ、國民でもない。ところが、今日の人間は、皆んなこんなグズグズした奴ばかりである」と喝破して居る。

成程、公民としての訓練は必要であるが、それが爲めに甚だしく自然を犠牲する必要が何處にあるか人類が結社の實在であり、共同的に生活して來たことは有史以來のこと、此の狀態に適應することは、敢て天性を損ふものとは謂ひ得ないと考へる。ルツワーの言はルツワーの時代に於てこそ言はるべき言であり、言はねばならぬ言であつたらう。たゞ問題を提供した丈に止めて尙深く考へて見たい

◆やもめ訪問

吉田 壯 一

京城の右士中、やもめ塾をしてゐるものが可なりある。先づ河内山、飯泉の兩塾を初め、若い所では生田、森、古手田等、等。そこで同じやもめの片岡校長「この夏休みには、一ツやもめ訪問記でも書りますかな」

くは射はめのであって、彼の補 度は人を不自然なものとし、又 人は、一ツやも訪問記でもや
正成が「巨生きてあらわれ限り」と 人から絶對的存在を奪ひ取つて關 りますかな」

醫 人

今 本 義 胤

鳥が油揚を啣へて樹の枝に休んで居ると其下を通りかゝつた狐が「あなたの聲は大變美しく音楽を聴く様だ」と囁いたのを真にうけて、止せばいゝのに、カアアと啼いたので、油揚は落ちて狐のものになつたといふ囁がイソツブにある。

工藤氏のあたらしい過賞の辭を頂戴した私はすつかり字頂天になり、イソツブの鳥以上に逆上してしまつたのである。それに現在より以上失ふべき何物も所有せない私は、寂しいが氣楽な境地であるので、委細構はずガアアと瀟瀟を張りあげんとて原稿をお渡しする。殊に裏め手は圓黒き狐ではなくて、博學多識を以て鳴る朱雀なので鼻高からざらんとするも得べけんやである。

賞をいへば獲られたきり、此の邊で荒蕪を守つて居る方が地金を暴露せず賢明な態度であるのだが、紳入りは紳入なりに、人絹は人絹なりに本來の襟襷を臆面もなくさらけ出す事にする。

醫人といふ言葉に獨り勝手の定義を下して、試みに「醫人とは人類より疾病を、完全に驅逐せんと努力しつゝ、未だ之を得ざる人」と言つてみる。

健康長壽の數き美果を、世界の人々に残る隙なく振舞はんが爲に、萬有科學の全般を注視しながら之を綜合解剖し、生の神秘の探究に、又

病的現象の弊醫に、大童になつて糞糞しつゝあるのが醫人である。

幾多先達の業蹟も、現代朝野の研究隊も、儼然たる理想の殿堂への基礎工事に過ぎない。

まこと現在は進歩の道程にあるからには身は乏しき一開業醫であらうとも「診療に従事すること」それだけが、決して任務の總てではないと思惟する。

絢爛の大業蹟は非凡の天才に俟たなければならぬ。エポックを劃する大發見は、卓識ある偉人にして初めて成し得るところである。

私の翼ぶのは總かにても、ほんの些少にても可なりである。既成醫團に何ものかを寄與して斯界の發達に貢獻せねば、眞に醫人たるの任務を全ぶしたもとは言ひ得ないではあるまいか

かく觀じ來つて、さて靜に自分の能力と立場とを省るとき、念願は切であるが、求めつゝ未だ得ず、到底得ざる人で終るであらうことを思はれて悲し。

以上の様なことを書綴つて自己陶醉に耽つて居ると、來訪者があつて、醫師と其知人との間に往々交はされる話題に進む。

「お醫者さんは瀕死の重病人を治して感謝のお禮を言はれるときは、誇と愉悅を感じられましょかね？」

「全快した折は安堵と喜びを感じます。確に酬ひられた氣が致します。然し醫者は自然の忠儀に過ぎないといふことを悉知して居る、敏やかな醫人は決して治したとは思ひません、癒はつたと考へます。患者の過信に基いた言彼られた讚美や感謝に向つては、矜持どころか唯慚愧あるのみです」

相手は解つて呉れたのかどうか、なほ醫業に就て禮讃を續ける積りででもあらうか。

「お醫者さんは結構な御商賣ですね、樂で居て儲かるんですから」

私の家にバットや五寸釘のなかつたことは双方の幸福であつた。

HEIMKEHR-

たにくち・ちよー

×

なんとなく

田舎娘の素朴さに
似たりと思ふ 獨ごと云ふ國

×

美しくも

口紅させる歌女に
つくづく似ると フランスを思へり

×

一二月九日マルセイユに
て驍名に乗りて歸路につくー

妹と子の

ふたとせ あかぎ待てる身ぞ
萬里の旅路 さも多くあれ

×

その昔

岩窟王の住みしと云ふ
シヤトウ デイフよ 紺青の海

×

一地中海を経て紅海に入るー

陸に立ちて

しみじみと物思ふ
シシリ島の燈を眺めつー

×

塵量の

繪になして見て もらいたし
アフリカの野の 曠の空

×

くれなるに

淡紫にしぞらを
染めて 夕陽は紅海に落つ

×

おぼしまに

倚れる をみなのスカーツに
夕風涼し 海は静けし

×

一スマトラの島を眺めつー

ちよぎけき

小岩の上に 三つ二つ
椰子樹の見て 燈臺淋し

×

星をまた光れり

うはたまの 夜の海暗し
われ あやなく 淋し

×

南歌の

乙女の髪に さうま欲し
ベビーバナナのきいろ濃きふとらぞ

×

一一月四日故里へー

この夜半に

われはも 瀬戸の海に入る
われ待つ國のふところに入る

×

心事

片岡喜三郎

京

城

雑

筆

その二

自分の世話した養年で三年ばかり前から太田あたりで教育者の席末を勤めてゐるのがある。年始獄も忘れ勝ちなほどの筆不精のものであるが、便りのない間は無事にやつてゐるものだと心得てゐると敵から棒に突然やつて来た。

三年真む間に大分大入りびきて髪なんか當世のオールバックにして大變ハイカラになつてはゐる。何かをわくして落付かない不安らしい様子である。

『ぞあ珍らしいね、學事視察と云ふのかね』

『どうも無沙汰をして申譯ありません』

『まあいさ、今頃視察なんて田舎は氣榮と見えるね』

『はあ、いゝえ』

『もうどこか良たかね、三年前とは餘程變つてゐたらう』

『いや、なに……』

『それで何日ばかり滞在か、宿はどこへ泊つてゐる？』

『下宿やです』

『下宿屋なる程及遠のところ、そこではないです』

『養年から調子が傾るおかし。こいつは視察で来たのではないわい、何か出かしたに相違ない。』

『學校の方はどうです、勉強してゐるでせうね』

『實は視察に来たのではないんです』

『どうも變だと思つた、どうしました』

『もう學校はやめたのです』

『おやくちと手厳しいね、そこまで行つたとは考へなかつた』

『それで義務もあるし、やめれば兵隊へ行かなければならないし、ご相談にあがりました』

『ご相談はいゝが、随分短氣なことをやつたものだね』

『つまらない誘惑にひつかうつてしまつて』

事件は明白となつたが、同時に彼は穴があればもぐりたいと云ふ風に顔を眞赤にした。まだ見込はある。

『體態だね、相手は何んです、酌婦か』

『看護婦です』

『看護婦はひたな、いゝぢやないか貰つてしまつたら』

『それが申すのしたゝかもので外に男か三三人ある相です』

『どうして引かゝつたんです』

『友達が怪我をして入院したので度々見舞に行つたのです。その内變な事になつてしまつて』

『見舞をたしに敵本主義をやつたんですね』

『どうも申譯ありません。全く一時の出来心で』

『若いときには有り勝ちのこと』

る。まあやつてしまつたことは仕方がない。それにしても退職せぬ内に相談すればよかつたのに、今となつては後の祭りだ』

『どうしたらいいでせう』

『どうしたらいいつて、そもお手輕に返事は出來ないよ』

『新規に出直さうと思つてゐます』

『それがいい、それがいい。君はいくつかい』

『二十三です。労働でも何でもやります』

『その覺悟で行くさ。一べん位轉んだつてちつとも差支くない決して力をおとすな』

『東京へ行つて勉強しようと思ひます』

『それもよからうが、どんな風の退職だね』

『依願免旨です、病氣退職です』

『そんなら何とかなりそうなものだ、少し考へて見よう』

『どうぞよろしく、時に鐘が一向なくて』

『女につき込んでしまつたのか』

『どうもひどい女でして』

『下宿代位何とかしてやる、安心してるかい』

『有り難うございます』

養年は一先づ引きさがつた。とらうく彼も平凡な七轉びの第一回に出會つたのである。

◆扇子の蔭に

平田久雄

若草町本願寺のズグそばに、羽山尙徳といつて觀世流の先生、キトは有栖川宮家の御家人、國學者であつて名家、明治二十年頃獨逸山人といつて、京都日之出などで鳴らした人である。

北海道修道院

平山政十

此處が第五回目の北海道旅行で、いつも雪の原野をそりで村から村へとすべり廻るのが仕事であつた。朝鮮から出掛けた田舎者でも、北海道では別に之れと云ふて目先の變つた感じもなかつたが、我々の語實眼で觀た北海道の土地は實に肥沃な端々した地味で、そこに思ひ切つて牧草を作り込んで、一年分の飼糧を收穫する此の大陸的な牧畜事業の發達振りを見る度毎に朝鮮には、歸り度くない様な感じがする。今一つは北海道で有名なトラピスト修道院である。北海道の一原野に獨自の生活を營む、純キリスト主義の生活者、キリスト在世當時の信仰生活を、そのまゝに行ふべく生活する此の不出世的な、無言行者の群れを觀る度毎に、自らの姿の醜さを深く省みさせられて、首の垂るゝを如何ともなし傳なかつた精神的の煩悶である。此のトラピスト修道院は、世間にはまだ廣く知られて居ない、現在全部で六十名の修道士が居る。年中同じ衣服に同じ食物で、眠る時も定まつた時間で終始一貫、祈りと働きの研學とに目を暮らすのである。朝は二時から夜は八時、板でできた寢室に木製のベットの所に、深い眠りに入る彼等は、いつ死んでもよいだけの覺悟はたへず持つて居る。まことに死ぬために生きて居ると云ふのは眞理である。免れない死に向つて直面して行く、避け得られない處の死の剝奪が脚下に展開してゐる。百の齡が何んだ、無限の前には、まことに牛文錢の價値もない。肉のみ生き行くことを望む人よ、まことに人はペンのみで生きるものではないのだ。破れた衣服に細潔

な眞實をつゝみ、土でよこれた顔に柔和を現す物言はぬ口に愛を語り、其の眼は謙遜を意味す。幾千里の故國を去つて、異郷の空に神の言葉のみに生きる群れ、虚しい、形骸の肉身を離れて、無限の平安を望む人達の群れ、其の心には愛熱がある、強い信仰は無所得の愛を行ふて居る。言葉なく、寧ろ常に多くを語り得るものよ、神と一致して行くからだ。又た内省を欲するが故に、遠く神の國を見つめて居る。あゝ、そらだ修道士達よ、おん身達の幸福な喜びは世俗に住む人達の心には解るまい、まことに感かたことと思はれやう、『自ら高りする者は卑くせられ、自ら卑りする者は高くせらるべし』

心に誇らず、みだりに眼に樂しませず、享樂を追はず、眞に實際を尋ねて怠らず、己が力以外の事を思はず、只管に黙想して常に覺識を重んじ、謙遜を體得して、靈魂と肉身を平行にして一端のみ走らぬ様、斯くの如く道を行く人の心には、僅か許りの油断すら許されない。道を修し、共同に生活して行く人達は、眞實に超個人的信念に住してゐねばならない、即ち己を虚しくする、と云ふ觀念は最も此の超個人的態度を證明したものである、と同時に亦た出来るだけ超個人的でもある必要がある、即ち分業をなし、人々の分上を守る上に於て、出来るだけ強き内省を要し、全き責任の觀念を必要とするからである。

個人的信仰が各個人の徳業を向上させ、超個人的信念が聯絡した分業を發達させる。この兩端が圓滿して、靈的練達工場なる修道院生活の意を形作つて行くのである。彼等修道士達は身も心も一切を神に明け、一意専心神に祈り、終日無言、不毛未開の地を體鑿して、沃野をどしどし掘けて行く、家畜をどしどし改良して行く國家に盡すことが可なり大きいではないか、妻子も持たないで、生涯を祈りと勞動に費やす、其の心もちが、しみなく有難いではないか。勿論一厘の給料を貰はず、貧しいものを食つて生

民謡

石堂雋一

追分

あゝ山越えりや	わしが里
雨降りやしんすな	嫁衆の
晴の衣裳か	纏るゝゆる
里に着くまで	待つたも
○	
嫁御の駒よ	はよ行かしんせ
暮れりや時雨が	降りさうだ
峠越え行きや	路が見える
はよ行かしんせ	嫁の駒
○	
嫁御十八	振袖姿
笑めば夜露か	散りかゝる
馬子の鼻唄	鈴の音シャンク
やがて木がくれ	草がくれ

運を捧げて、静かに強く大地を耕作する、其の心もちが實に高潔ではないか。他人からはほめられやうともせず、終日神の御前に黙然として働く、彼等には所有權と云ふものがないから、野心がなく働ける。野心がないから私慾がない。私慾がないから、平等な愛をもつて働きかつ與へられる、ほめられやうとせないから成功とか失敗に心が左右されない、ただ人事をつくして天命をまつ、全力を傾け盡して一切の成功は神の御手に歸す。ただ終日、分秒、汗を流すことと、たゞざる祈りとが彼等の行手であり、慰めである。

『兄弟等よ、私は死なねばならないのだ』この言葉が深刻に彼等の胸底に記憶されてある。地上の生物は屹度一度は死なねばならないのだ。何と尊い誠律ではあるまいか、常に死に直面して働く、その油断のない觀念よ、たゞ人間が社會人として、最も深く考へねばならないことは生活する權利を行ふ時、自分がどれだけの社會的義務を果して居るかと云ふことを内省せねばならない、有り餘る程の實徳を持つが故に、職業を持たぬもの、亦た職業を持つことによつて、富者として自己の尊厳を享すると云ふが如き空想を描く者は、社會人として生存の權利を持たぬ者である、所謂遊民である。寄生物である。それ等の人は自分の子供さへ自分の手で養育しない、亦たしない事を以て上流な家庭、尊貴な主婦と心得て居るなら、夫れ等の人は野獸よりも劣つた、母性愛の尊貴さを知らない非人間である。何とならば、私運は人類を愛したい愛するが故に優れた人間を養成するには、先づ母性としてたゞざる責任を負はねばなるまい。而し以上の様に自分の乳をのみまき、わざわざ他人の乳を飲ませることが誇りだとしたら、夫れは非人間的行爲だと言はれ得まいか。亦た如上の様に無識な自分を饒れた人間、上流社會の特權表現だと思つたならば、夫れは亦た誇りもない非國民的思想であると思ふ。(以下次號)

人間活用

早田愛泉

平々凡々の人物を使用する場合は何事にも指揮命令で動かす事必要であらうが、相當物の役に立つ人物を使用するには之と異つた使ひ方をすることがよい。即ち大局を統括するが細部は各其部下に委せて其天分の材能手腕を發揮させるがよい。諸葛孔明と關羽、張飛を部下にして甘く使つた處は劉玄徳の偉い處で、韓信と蕭何及張良の三傑に自由手腕を振はした間が漢高祖不世出の器量であつた。

之に反して弟義經の功名を嫉み之を排斥した源頼朝は源氏衰亡の原因を造つたもので、又一の明覺光秀をも包容することではなかつた鎌田信長は遂に部下に反逆されて敗亡したのである。若し頼朝に弟義經の功業を嫉む心がなかつたら源氏は益々興隆したに相違ない、又鎌田信長が大度量の人であつたら、あんな結果を招かず大偉業を立てたに相違ない。

斯様に考へると人の長たる者は部下の功業を助成する心と大度量が必要の條である、部下に功業を爲さしむる事は其上役の偉大を發揮する所以で、決して其上長者の斤目を輕くする者でない、齋藤總督は此點に於て誠に現代稀に見る大人物である、水野政務總監や下岡政務總監等に自由に手腕を發揮せしめて毫も猜疑嫉妬の心を起されなかつた。私は此總督の度量と態度を總督府の高官方に學び做はれたいと希望するものである。下々の能ある者には可成自由に其才能を發揮せしめて其功業を助成する事に努めて貰ひたい。決して國情心等起さず、部下の向上發展は自分の偉大向上を脅かすものであると思ふて朝鮮統治の爲めに盡して欲しい。

雪濃湯

醜態協會 山村 翠

上戸ならぬ自分はマクカリに馴るゝを得ず、薬酒に親しむを得ず、と云ふてキミチイの臭きに親炙するの勇氣も出でず、在鮮殆數年、鮮化の遲きを思ふた。

然るに雪濃湯を得て初めて朝鮮風味に接觸し得たるを喜ぶ。雪濃湯は滋養豊富である、簡單である。冬季に於て可、夏季と雖も辭すべきにあらず、尙其の容器の簡素なる一層懐しさを感ずる。

兩班も來れば擔糶も來り、學生も食へば紳士も喫する、一視同仁、白鹽と生葱と、蕃椒とは何人も匙を入れて自由に之を攝る所、和氣自ら生ずるとも云ひたい。

毫を甜りて深更に及び、發覺息を生じて眠に就く、翌日早起 口を漱いで直ちに雪濃湯家に到る、家の附近に到れば異臭鼻を衝く、此異臭は不思議に食慾を喪る。

朝の雪濃湯は他の時刻に比し、一層美味である、キラキラとした脂肪の珠、大小幾つとなく匙の裡に浮ぶ、朝鮮ホテルで味ぶスープは餘りに淡に過ぐ、雪濃湯は其の度を得て居ると云ひたいが、實はチト濃厚過ぎる。肉も骨も皮も臟腑も、腦髓も、眼珠も舌も皆一緒に釜中で煮るのであるから極めて濃厚である。

最初の喫は稍醜態を生ずるが、匙の加はるに従つて味を感ずる、但し白鹽を適度に湛することは忘るべからざる條件である。

其博士が著はされた『朝鮮の匂ひ』と云ふ本がある。此本の匂ひは未だ嗅いで見ないが、博士の文章は他の新聞雜誌で常に拜見し、博士其の人にも會ふて其如才なき醜態振にも感服して居る。恐らく雪濃湯の匂ひ程朝鮮の匂ひらしいものはないであらうと思ふ。

再々虫の話

福田有造

京

城

雑

筆

虫に就いての結論を急がねばなりません。世間と云ふものは廣い様で至極狭いもので、虫を封じて呉れる良薬を知つてゐるものはないので、自分の體內にゐる虫に就いては、自らが一番よく知つてゐる譯ですから、大斷案を下さねばなりません。

どうせ新聞や雑誌の記事と廣告には、ロクなものはないのは當然だ。そんなつむじ曲りの體內の虫を根本的に治療する薬はない筈だ。世界の名醫でも知るまいから、まして僕の友達の醫者にも試みに聞いて見たらば、或は何か知つてゐるかも知れぬと思つた、けれども不可解だと云ふ。

『それは學生時代から貴様に就いてゐる虫だから、所詮治療しても病膏肓に入つてゐるので、駄目だ』と云ふ。

貴様も折角醫者になつてゐるんだから、友誼甲斐にその虫を退治する薬を發明して見ろ、トツカペン以上に賢れるぜ、他の様な虫を有つて惱んでゐるものが、世の中のどの位あるか分りやしない——その論文だけでも世界的大名醫の資格はあるんだ、どうだ研究して見たらばと云つたら、相變らず不可解だと云ふ。

ダーウインの遺傳論には、必ずしも親の形質が子にうつらないと書いてあるがその通りだ、最もこ

れからどんなに進化してゆくか保證の限りではないけれども、その進化説の様に人類がゆけば大變なものになる、人間の前途が『？』の如くに形質だつて『？』でなければ人間としての面目味がない譯だ。虫だつてそなた、虫も或は原始時代から稀薄な遺傳が遂に濃厚になつて、現代人の如き變手古なものが出来あがつたものではないでしょうか。

大斷案を宣言するといふ前提のもとに書いてきたけれども、現代人が行きつまつてゐる如く虫もゆきつまつて、治療方法もなくメスを持つてやる外科の大醫もない譯で、この虫退治は醫者よりも或は道學者とか宗教家とかにもつてゆくべきものだと思ふけれど、虫は世の中に道を説く奴隷的なものはない……と云つて到底そんなものは寄せ付けもしないんだ。これが良薬と云ふと眞面目腐つて云ふ友達には喉をべとく吐いて知らぬ顔をしてゐる……。

虫は危期に瀕してゐる、明暗の迷路に立つこと久しいのだ、この大難所を切り抜ければ必ず眞の人間味のあるものになり、世道人心の綱腰を云々する世の偽善者を一蹴して、虫は凱歌をあげて虫の本領を發揮するであろう。虫は社會のすべてに入ッ當りして、どうも近代人の通弊、それは苦惱を

享樂する虫はすべてに於て馬鹿な體験のみを覺めて来て今日にたつたのである。もう虫もいゝ加減に正體を表現して葬り去らなければならない。大斷案をする前提のもとに書いて来たけれども、良薬も名醫も治療方法もなきが故に、結局はその虫は葬り去るより外に道はない。虫は『？』でどうも現代の社會には不向なもので、正體も不可解で、考へて見れば何と世の中はつまらないものであるか。この位の虫に勝手な歌を吐かせて、吐かせつばなにして居るとは情ないではないか。

僕もどうも持てあまして虫と縁を切りたいけれども、切りに切れぬ縁の綱で、流獄して文句なしに葬り去る、殊に『新しき吾を見出しとある日に覺めたる歌を歌ひつゞくる』と云ふ或歌人の歌を思ひ出して、獨り微苦樂を彈した最後に虫は斯く歌ふ。

舊稿を今更らながら見つめつゝ
吾も老ひたり妻も老ひたり
虫なればかくまで吾を見捨てず
に苦しみなやませ宿命として
要するに虫を葬り去ることは醫者も道學者も宗教家も何にも煩はず必要はない、僕はその虫の居どころを現代の社會の續に障らない静かな高處に置いてこの虫のつむじ曲りを回避しようと思ふ。世の中の虫に惱める人々よ、かくせよと今度は虫から教導して終りにしたい

◆聞くがま◆

平田久雄

前の人は談論風發、今度の人は沈々黙々……併し何をなく親しみのあるのは、新選信局海軍課長澤永さん。黙つて着々仕事する人で前任地鎌南浦では頗る評判が好い。

牛 跨 君

工 藤 武 城

牛跨とは、往來に道を極まつて牛が立つて居て邪魔な時には、避けるのも面倒と計りに、其まゝ跨いで通る大男なので、人がつけた渾名である。

本名は大空武左衛門と云ふ。曆と算數を以て細川侯に仕へた國士と云ふ僕の曾祖父の纏腰に召使つた下郎である。

此曾祖父は餘程物好きな風變りの人物と見て、國に居る時も、藩公のお供で江戸詣をして居た時も坐側で召使つて、身の廻りの世話をさせたのは、此大男なる牛跨の武左衛門君と、起つても三尺に足らぬ、坐すれば火鉢の上から丁番が見へる計りの一寸法師君の二人であつたそらだ。

一寸法師君の事は判然たる記録が無い、唯牛跨が股を廣げて起立すると、小法師君は樂々と其股の下を通り抜けたとか、食事の時に奥高の猫脚膳の前に坐れば、首から上だけは出なかつたとか、祖母の變物語に聞いたよけである。兎に角、無類の小男であつた事は確かである。

此に反して吾牛跨君の方は、當時の計測法としては完全に近き迄の記載が残つて居る。手掌に黒印肉をつけて大阪業機紙に押したものが現に自分の家に蔵してある。

文政十年の参觀交代の節、當時二十三歳の牛跨君は、曾祖父に供

はれて江戸に上つた。何しろ種代の大男と云ふので江戸中の評判になり、當時版下繪の大冢溪舟英泉の懇望に因り、其似顔繪が江戸繪に描かれたそらだから、錦繪蒐集家のコレクションの中にも發見することは困難ではなからう。

大空武左衛門の牛跨君は、肥後國上益城郡失部の庄に生れ、余の郷里なる同國玉名郡小田手長、伊倉の庄に奉公に來たのである。

其頃牛跨の身長は七尺六寸、體重五十二貫目、腰圍八尺一寸、下顎から頭部の頂上迄三尺二寸、手腕の長さ一尺二寸、足臈の長さ一尺四寸、両手掌を合せて此に白米を量り込めば一升三合を容るゝ事が出来る。酒は餘り好物では無かつたが、飲まずれば三升位は平氣で平けて、けろりとして居た。飯は一回量白米二升五合、或時は眼の下一尺五寸の鯛三尾を刺身と煮附にして、べろりと食つて仕舞つた。

右は牛跨君に關して數學的知り得る記載である。計數を専門とせる曾祖父の殘したものであるから確實なるものと信じて、差支なからう。

肥後屋敷の若侍の連中が發起となつて、回向院の本場所を踏ましてはと云ふ事になり、藩公邸内の土儀で大關以下幕の内の連中と試験的に取組まして見ると、未だ會

【巴六】

つて相撲道の雅備智識もなく、練習もしなかつた牛跨君は、徐ろに相手方の頭を両手で掴んで、土儀外に掴み出すだけで、あわれ天下の横綱も恰かも龜の子の角に吊された如く、如何に手足をばたくしてもがいても、何とも仕様が無い、てんで問題にならぬので、年寄連が哀願するにまかせ、相撲に出ずのは、取止めになつて仕舞つた。

扱て理近に至る迄に、吾國學界に於て確實なりと認められて居る巨大漢のレコードは

一、カヤトス、芬蘭人、ドクトル・ドビナール報告、身長二百八十三仙迷（八尺五寸）

二、ハレス・クロウ、英國人、ドクトル・キヤリー報告、身長二百七十五仙迷（八尺二寸）

此男は僕も巴里滞在の中見世物に出たので見に行つたことがある。中背の佛蘭西人がシルクハットを載せて立つても、ハレスが水平に延ばした腕の下より遙かに低かつた事を記憶して居る。本人自身が見物席に自分の繪端書を賣りに來たのを買つて置いたから、アルバムを探したら残つて居る事と思ふ。

三、コンスタンチン、生國不明なりしか記載なし、ドクトル・ジエフラーニ報告、身長二百五十七仙迷（七尺八寸）

然して吾が牛跨君は身長七尺六寸であるから、世界古今のレコードとして正さに第四位に在るのである。

次に日本だけのレコードを擧げて見れば、

一、大空武左衛門、身長七尺六寸、體重五十二貫目。

二、肥後國平岡の百姓阿曾右衛門、身長七尺五寸、體重五十貫

目、對馬洋、身長六尺四寸。

大和民族よ決して落膽する勿れ。遺傳の鐵則を遵奉して人種改良に

- 二、肥後國平岡の巨鞋阿曾右衛門、身長七尺五寸、體重五十貫目。
- 三、生月鯨太左衛門、身長七尺五寸、四十五貫。
- 四、伊豫國大洲の磯五郎、身長七尺三寸、體重三十八貫目。
- 五、關西齋藤右衛門、身長七尺一寸五分。
- 六、九紋龍、身長七尺。
- 七、高崎縣桑田某、六尺九寸。
- 八、出羽織、身長六尺六寸。
- 九、大砲萬石衛門、身長六尺五寸。

す。

十、對馬津、身長六尺四寸。右のレコードが示すが如く、日本に於ける巨蹠第一の榮冠は、正さに吾牛蹄君の所有である。國自慢となつて甚だ相濟まぬが日本レコードの第一、第二は共に僕と同國の肥後生れである。明治より大正にかけてのレコードたる出羽、大砲、對馬津と較べては一尺以上の距離があつて、まるで比較にならぬ。

世界の倭小人種に數くらゝ、吾

大和民族と決して落膽する勿れ。遺傳の鐵則を遵奉して人種改良に努力すれば、日本人盡く六尺位のヂヤイアントとなることは、決して不可能では無い。

此ボスシビリチーを如實に物語るものは吾が牛蹄君である。

◆頬杖ついで

吉田 莊一

◎おん大がおん大だけに、山口銀行の連中はみんな文藝、藝術を愛してゐる。所謂話せる人が多い。

◎日本生命ビルの中にある京城祭業がヤハリさうだ。富野さんでも、鈴木さんでもめづらしい讀書家である。

◎天號には、富野さんのものを紹介したいと思ふ。

◎銀行集會所の加藤さん「観るのは大好きだが、さすのは一向自信がない」といつてゐるが、どうして、あれで將棋は仲々の強手だとの評がある。

◎土地雜宅の末森さん、八十何軒あき家のあつた會社を引りけて今ではたつた五六軒の空家にした「何かコツがあるんでせう」といへば「あるとも、借家哲學といふ奴が大いにあるさ……」閑を見て、乃公自ら筆を執られる等。

◎『心の友』の大浦眞道さん、例の筑紫の女王白蓮さんと懇親で色紙短冊を數十枚書かせ、京城に戻つて友人知己に頒つ。しかるに未だ旬日ならず、忽ち宮崎東と森通したので『大浦さん、御好意は難着いが、之は當分御返却して置く』十人が十人突つ返して來たので、大浦さん「……しまった我輩一生の失策……」

白壁秘詩

戸 嶋 英 一

信州小諸に城址がある。寛永時代、島崎藤村氏はその城址に行つては、若い情熱に迸る空想を思ふまゝに描いたものである。殊に長處の高樓の白壁には指に唾をつけく書かれた、あやしい文字が秘されてゐるといふ。

藤村氏の詩に次ぎに歌はれたやうなものがあるがそれは小諸の城址の白壁を歌つたものである。

誰か知るらん花近き
 變れは登り行き
 飄れて長き苦しみを
 うつし出でけり白壁に

唾にて記せし文字なれば
 人知れずこそ乾きけれ
 あゝあゝ白き白壁に
 わが憂ひあり涙あり

ところが、人知れず乾いてゐると思はれてゐるその白壁も、ちがらちか或る藥液でどんなやうなことが書かれてゐるか、塗布されたその秘密が現出されるだらうと云ふ。藥を塗つて見たいと云ふ人は、先頃迄千葉醫學の法醫學教室にゐられた高田義一郎氏だ

清き一票

鉦鹿曉太郎

清き一票が御隣儀をさせる。

候補者初め俾らそらに見えろ人が五人も八人も、紋付羽織に袴を穿いて其の一票の持主に叩頭願する。夫れも一回や二回ぢやすまぬ。少し早目に名乗りを揚げると七八回はやらねばならぬ。

叩頭心理と云ふやつを考へて見る、かどみさへすれば忌受だと云ふ者は千人に一人もあるのではないが、夫れでさつぱりあてにはならぬ。どうせ入れるか入れぬか判らない。只上手の鐵砲打ち式で行こうとタカを掲げて居るのだから、單に御隣儀が敬意の表彰と即断しちやいけない。形の上の叩頭は案外心の叩頭でない。單にかぶんですむことなら陸兵や孤兒院が買藥や化粧品を賣るときと選ばず、いくらでも之を意としない確固たる信念があるのだから恥て驚かぬ。

清き一票が名前入りの大襪を作らせる。赤地或は白地に大きく書いたり染め抜いたり、活動寫眞のどう宜しくで、紺や野蠻色の配合によつて之れに價値付けんと努力する。襪と名前が眼立って呉れることなら大抵のことは差繰つて仔細ない。どうせやるなら奇想天外と云ふ素敵なやつを考案して見たら、併し特許と云ふ譯には行くまい。

選挙運動の進歩する處、遂にはチヨン監に麻上下、紙箱の草履になめし車の足袋、白扇で袴の隙をポンと叩いて『之れはく』と有難者の前に罷りツン出る候補者、大紋長袴、大烏帽子、黄金造の太刀佩いたる自稱選良、黒糸マドシの

大襪に二尺八寸の業物をたばきみ、二十四刺したる白羽の矢負ひ、連鏡薔毛の太とくたくましきに乗つたる自稱公職者が飛び山さんとも限らない。吾人は首を長くして此の百鬼畫行的場面の開演を待たう。

清き一票が大立札を製造せざる。南大門を巡る大中小各種各様の立看板、日を逐ふて此看板が大きくなる。門の屋根迄は及ばなかつたが四十尺位のはサウにあつた。併し大きくなるにも限度がある。字の工夫かとも思ふが、映畫のタイトルに文字を圖案化したのでは姓名の周知に都合が悪い。提燈屋の字が一番よく判るが其の効果は僅少だ。ドラしても色電氣でも使つて夜間の廣告をやらねばなるまい。そうなるも選挙地盤に特に眼付きしい奴をおつ立てることも一方だ。街が明るくなる丈でも助かるから。

清き一票が變つた名刺を拵へさす。大なるものは縦五寸横三寸五分、小なるものも縦三寸八分横二寸三分、大小實に十八種桃色の吸紙紙を使ったもの二、姓名のみものは僅に三、候補者と掲記したもの七、選挙心得を刷込んだもの八、清き一票を××君としたもの二、『皆様の御同情で當選を祈る』のが一、名刺も大きいのが目立つけれ共、ポケットに入れぬ程大きなものは持ち扱へぬから大きくなる餘地は乏しい。紺色刷り繁昌の時代が来るかとも思はれる。獨り桃色許りではない。紅、青、紫、黄色とりぐの名刺が市中隈なく振り播かれたら如何に濃艶であらうかと之を豫想してツツとする。

清き一票が休憩所を作らせる。テント張りだが車道をさしはさんでスラリ軒を並べた處宛然、縁日の夜店だ、低き大幕を懸して立つものは寒冷紗張りの立看板、何れを見ても能筆にネジ付けてある。一序でだから云ふが選挙場の入口に貼つた『名刺を御出し下さい』は、悪筆は一生の損の様な水筆の跡であつた。休憩所の内部に控へた運動員の腫は絶えず通行者に注がれて居

涼

田中俊雄

尻を放つておかしくもなし一人者

淋しい一人者の身環がしみくも出てゐると思ふ。

姑の尻敷を先選と嫁こらく

うら若い、赤い手柄の、可憐な嫁の姿が思ひやられる。

同じく嫁を主材として

嫁の尻は五臓六腑をかけめぐり

いつい姑の面目が、そこらに見える様だ

尻といへど仇なるものと思ふなまづつと

いふ字は佛なりけり

川柳には、尻に関するものが多い。

汝等は何を笑ふと隠居の尻

韓信にいちの悪きが尻をかたせ

『君子の尻は善し』といふ虫のいふ格言がある。『放尻百過百自通』といふ身勝手なものもある。『放尻一發三徳あり』と稱して下のやうな歌を作つたものもある。

尻をひればおなからすいて気が晴れてお

尻の腫かをとれてさつぱり

太閤の御前で、曾呂利新左がツイとりはづしたさうだ。するとイキナリ太閤が發止と

鬨子で新左の頭をつた。へこむやうな曾呂利でない、怨ち一首

尻をひつて國ヶ國を得たりけりあなま

播磨で尻が備中

出来したといふので、右三國から一千石、加藤されなどはウツかマコトか。

る、選挙に赴く有権者中より一名でも多く知人なり縁故者なりを見出すことである、更に角体體所に敬意を表する有権者は味方であらねばならぬ、此の意味に於て其の多數を引きつけることを必要とする。此頃流行のラジオでも取付けて好い舞でも聞かせるか、又は豫め本人の立候補宣言なり所謂挨拶なりを蓄音器にでも吹き込んで置いて、其のレコードをかけたばなしにして置いたらどうか。

イツソ叩頭のフィルム……醜談云つちやいけない、そんなものが畫聞映せるかい。

清き一票は女子と子供を活動させる、入口の正面に立つた二三女性の如きは實に勇敵奮闘した。其の差出す名刺は不思議と誰れもかれもが受取る。あたり美人が陽に焼けると氣を採んだ向きもあつたが、陽に焼ける位は何のその、實に多數の賞讃を博した。女子は斯くあるべしあらねばならぬと、休憩所には尙數名の女性が活動して居つた様だ。

時代は移る、婦人子女をして徒らに丁寧なるお辭儀と愛嬌笑ひに終始せしむることなく、彼の女等をして自ら選良たらしむることを期せよ……誰れだ『のり』の様なこと云ふのは。

清き一票が街路を汚す。選挙運動別名『紙貼り紙配り』板垣ひの端、陳瓦塀の隅、ベタくと貼つたる紙は決して剝がさない、夏過ぎ秋狙き多が来て塀の上に雪が積んで軒に垂米が行列をしても姓名の曝らしものは撤廢されぬ。

播きに播いたる名刺貼り札は街の到る處に散亂する、殊に當日選挙場の内外は實に紙片を以て埋むる許り、あたり名譽の御姓名が砂塵にまみれ土足に踏まれ見るも無殘の御有様。痛ましなると云ふ許りない。

清き一票は讀んで一萬五十九票、當落等しく定まつて其の意を閉づ。三年後にはより盛大により普澤にやることを考へて置くことぢや。

(一五、六、一〇)

筆の向く先

飯田三郎

吾れに紙を興へずむば、吾れ肉體の皮を剥け直ちに紙の代用を爲す、吾れに筆を興へずむば吾れ肉體の骨を抜き取つて椽木の筆を爲さむ、幾追筆何ものぞ、吾れは其幾追筆と戦つて、吾が信する所に據つて邁往せむ。とは英雄曾日蓮の喝破せる壯烈の宣言である。

史蹟地鎌倉を遺棄して日蓮五尺の體軀に取つて唯一城廓であつた慶應を訪ね、彼が三寸不爛の舌頭より法華經の蘊奧を説き、而かも時の爲政者を攻撃した其説法の遺蹟に臨み、更に龍口寺畔に於ける彼れの處刑場を見るに至つて、感慨無量を禁し得ざりき。彼れが舌鋒を以て將た又筆劃を以て斷斷乎と戦へる結晶は、今猶一天四海普歸妙法の一大教法として生き居る所に、彼れの超人間の靈動が立證せらる、偉大なる哉日蓮。

茲に斷つて置くことがある。そは吾がペン先の第一歩が先づ英雄曾日蓮の身邊から説き始めたれば、讀む人或は吾れを見るに法華信者を以て擬するやも知れず、併し吾れは法華信者でもなく、又宗教的研究者でもないのだ。唯だ日蓮の豪氣、日蓮の膽力、日蓮の奮闘ぶりを俾と爲し、法華信者とならないまでも、彼れが如き豪氣と膽力と奮闘とによりて、自己の薄志弱行を警め、自己の及び腰を緊張せしめ、所謂本義名分の何たることを悟り、而して健闘し猛移することは、現下直面の急問題だと吾れは信するものである。吾れ既に獨かく信するが故に他にも共鳴的躍動を動むるのだ。

我帝國は其建國の始めより今に至るまで一絲亂れず、上下の心相一致して茲に基礎牢固の大帝國となつたのである。人は謂ふ外來の堅むべき思想の爲めに、我國民の或る部分が蠢動し始めたのであるから、此時此機警我を要すと。此

説の如きは杞憂に値するかも知れぬ、併しながら學國一致の衆心衆力を唯一信條として來た吾れが同胞は、如何なる誘惑如何なる宣傳があつた所で、其魔の手にも觸まれて不健全的の國民となるが如きことは斷じてない。取締るに善法を以てし、導くに善處を以てすれば、一時惑へるものも輒々自覺するに至るのである。唯だ併しながら、教育の方針に深甚の注意を拂つて健全的國民を涵養することが大切である。

教育の方針、其れは如何にすれば宜いかと言ふ問題になるが、此紙上で吾れが説く所を聞かうとせず、當局たるもの自ら直言せねばならぬ

時々煥發の勅語は能く國民の本領を諷へ給ふと同時に、國家隆昌の所以、國際間に介在する吾等の覺悟並に道德の淵源、人倫の大道、國民の義務、共存共榮の意義等に亘つて訓誡し警戒し給へるのであるから吾等國民たるものは時々勅語を日夜誦讀して其勅語を奉じ、國民の本分を發揮し、「一意専心」「人生の人生たる意義を能く辨へて」「互に相匡し相警め、以て健全的國民となり、共存共榮に向つて順序よく進まねばならないのである。我帝國民としては教育勅語の大御心を能く講解するだけにとりて自ら緊張し自ら躍動することを得べき筈であると思ふ。

水濁らざれば魚鱗まずと、彼の歐戰の生ある思想界の變遷。是れ免がるべからざることに屬すと雖も、他が激變したからと言つて、吾も亦激變せねばならないと言ふ譯のものでない。各邦國孰れも國狀を異にして居る。然るに歐洲では斯く改廢したから我國も斯くするを要すと一意他に倣ふが如き、考へざるも甚だしいものである。他の長を取つて吾が短を補ふのは固より善策がないけれど、他は昔な斯くの文化的設備をした、路面の改廢をした、都市美を實現した、風俗も變つた、食物も改められた、娛樂も家庭も斯くの如く變つたと纏て他の爲すが如く改廢しようとしたら、甚だきは帝國特有の風俗美を一蹴して見るに耐へざる惡風俗に改め而かと簡易と稱し、新式と叫んで容顏の構造を變し頭髮を茶褐色に染め、女性の斷髮が流行するなどは、果して改善であり新式であるのであらうか。

吾が言の如きは所謂新人の怕ばざる苦言とな

夏 日

笠原要太郎

山 花

世の塵にけがれて咲ける深山邊の
花こそはなの中の花なれ

川 壺

児等はみなかへりしあとの里川の
やみを得顔に聳とびかぶ

郊外行樂

こらつれて雲雀なく野に遊びけり
賑おりつゝめだか抱ひつ

都 旅

我ながらみやこの言葉つかふまで
日數重ねて旅になれけり

机

老ひたれどつかさをやめしこの頃は
よらぬ日もなし女机の下

瓦

古の高麗のかはらのめつらしと
かけさへめつる人もありけり

晚 酌

ゆぶさばすかぬさけさへ折々は
くましくほしき此頃の我

友の病氣負舞にそへて

幾千里へたつるわれにあらなくは
君かりゆきて病見まくに

るのだ。又時代錯誤とするのであるが、我帝國の國體は超世界的であり、而かも舊國以來二千數百年間の歴史は、具さに其れを物語つて居る。大正二年五月、佛領印度から遙々我國を訪問した佛國の名譽判事ポールリミヤール氏を東京に迎へた吾等は、實に得易からざる有益な帝國論を身にしたのである。其末氏は如何に帝國を解し如何に帝國民を理解せるかを語らむ。

末氏の帝國論を總體的に記せば『日本帝國は實に世界に冠絶して居る優越國である。日本帝國の陛下は神の如き君である。而して世界統一の大使命を帯はせられて居る偉大な國君である日本帝國の有する二千數百年に亘る歴史は、正義と人道とを明らかにして居るのである。佛人たる吾等は母國の人に告ぐるが如く、日本帝國の人々に告げたい。そは此世界に冠絶した此日本帝國民は上に神君を戴き、而して國民皆な協力一致の結合力に富む。然るに何に感ずる歐洲の惡思潮に陥られ、歐洲の惡風俗を取るのであるか、吾等は忌憚なく言ふ、彼の歐洲に於ける過去の惡風俗と惡世相とは、今や貴國日本に迎へられて、彼等罪惡の國の惡潮を踏まんとするのである。諸子は光澤ある硝子の表面より歐洲を見て居るのではないか、其の硝子を破つて裏を見れば實に醜きものであることを知るまい。今や天の大なる使命は日本帝國に下つた以上、諸子は日本帝國特有の日本魂を以て其天の下せる大使命の爲めに活動せねばならぬ。若し活動するの勇氣なしとせば大に眠るべし、併し大に眠ることは天の許さざる所である』

嗚呼末氏は實に能く我帝國の歴史を知れる人であつた。帝に歴史に精通し居たのみでなく、我帝國民を理解し而かも帝國の將來を大觀し、歐戰終結後の直面的活躍すべきことを豫言したのである。吾等は末氏の此帝國論を獨り知悉し居ると言ふよりも、之を有志者に讀たん事を企て『告日本國』の題を付して其微より細に亘つた數百頁の一冊を各方面に頒つたのであるが、今は手元に一冊も残つて居ない。

吾がペンの先は之から猶幾多のことを綴らうとするが、限りある紙面を限りなく埋むることが出来ないから、茲でペンの先のインクを止むる。

漫語

永樂町人

○
將棋の駒には、一つづつ個性がある。

金は、金の作用があるし、銀は銀獨特の天分がある。

就中、香車や桂馬が面白いと思つてゐる。

鍵なりに行く桂馬。他の駒を飛び越して作用する桂馬。私は、桂馬を便の時、所謂しのびの者——

といふ感じにうたれることが多い。

香車は、行つて帰らぬ駒である。利駒のやうな駒である。一往不還——これが彼れの生命である。

私は、香車を使用する時、よく悲壯の感を起す。

○
保科正之や、備前新太郎少將は、將棋史にのこつてゐる大名棋客である。

豊稔の資を有つてゐる新太郎少將の棋譜をしらべて見ると、細心周匝である。深沈大度といはれた會津侯の棋譜を繰して見ると、奔放不羈である。

○
棋は、よくその性格に似ることもあるし、全くその反對に出ることもあるらしい。

世事に用心深く、一生冒險をなし能はぬ人は、その餘憤が餘技に溢れ、棋上の飛騰となることもあらう。

○
こゝろが面白いのである。

○
覺悟がよくて、どんな落手をさしても、斷じて得つたをいはぬ人

がある。
姿態堂々と對局してゐて、俄にあわて出し「失禮ながら……」と和を乞ふて来る人がある。

○
前者には涼氣があふれてゐるし後者には愛嬌があつていゝと思ふ。

○
夏——山房で、碁をうつてゐる一石々々のパチンといふ音が、竹林をよほして響いてゐるのは、如何にも涼しさである。

○
將棋の方は、本格としては、駒はツゲを用ひ、盤はカヤである。女人が對局してゐると、如何にも漂亮のひよきがある。

○
我々の將棋は、手法と共に、音もまた甚だ奇め。

○
炎天七月、碁を争うて、輦轡の何の地にあるかを知らざる云我境には、我々も出入するのである。

○
これを自體的にいへば、棋國に邂逅して、たゞて人間の苦熱を知らずと形容し得るであらう。

○
しかしこれ三昧の境地と思へば蓋し大開運の甚しきものである。

○
親の死に目に會はぬ——我家の覺しを知らぬ——乃至裏着の何の地にあるを知らぬ——これ共に、棋戲夢中の境、いはば熱頭逆上の地である。即ち足は板に滑いて居らぬ。一種の自己陶醉である。

○
高段の棋客を見ると、決してこの勢容はない。彼等は、どこまでも悠然、どこまでも從容。暑い時は暑く、寒い時は寒い。覺悟と覺念が、全身に通滿してゐる。即ち眞に棋國に遊んでゐる。

○
故に彼等の特徴は、いつも一局で足つてゐる。我等のやうに「もう一番く」等の、妄執がない。成敗共にサラリとしてゐる。棋狂は、決して大乗ではないのである

○
酒はよく三升を傾け、笑は一時七人をかこひ、一見豪傑の風があつたといふ天野新定は、どんな男であつたらう。

○
彼は、これらの不養生のために、四十三で亡くなつてゐる。

○
しかし天野新定は、百年のち我々の軌範となつてゐる。

○
今の名人關根金次郎氏が、尻切れ草履で、若い記者の私を訪ねて来て、會の執旗、會の記事をたのんだのは、僅々十七八年前のことである。

○
かれこそ、近世棋界の大開拓者である。

○
尻切れ草履から、目用車、大玄關、紋付羽織に一變する。——皆自ら耕したものである。

○
今日かれの大名ぐらしを、決して誦することは出来ない。

◆刀劍會其他

雜筆記者

○六月二十日、朝鮮神宮証券所で開いた刀劍同好會は、存外の盛會で、なかく名刀があつまつた。

○折紙のついた貞宗なども見へたが「これは今日の懸卷だ」と、三尖局長も感心してゐた。

○中には五字忠告ばかり専門にあつてゐる人、助價のみを一本筆で蒐集してゐる人などもあつて、頗る愉快であつた。

○何んしろ三天、前田、櫻井、衣笠、島田などいふ種古臺があるので、遣りやう一つでは京城刀劍會も、無論發達の見込がある。

○次會は七月第二日曜午前——會場は本町一ノ三三不老園ときめてゐる。同好はどうか御出席を。

長安寺

徳野眞士 業 會 鑑

見るうちに雲は動きて明日はわが
 立たむと思ふ峰は晴れたり
 去にし年れ絶頂にうたひたる萬
 物相は雲の上に立てり(送土)
 新らしき下駄をおろして露踏みて
 山原に下りて石を踏ふも
 風くめさぬ川に下りたら口そそぎ
 山に向ひて深き息する
 同じ川を幾度渡り同じ石をいくた
 びか踏みし魚釣らむとて
 疲れ來てたらうねすれば水その
 黒き魚かげわが眼を去らず
 榎の木葉かけ透してこゝなくも
 星きらめけり明日は晴れかも
 うしろへを振り返りつゝ人なきを
 見て尿せり川に向ひて
 雨後の夏の晴照れば五月野の若芽
 の如く雑の葉光る
 奇しき松重なり生くる響迦峰のい
 たじきのみは霧ものこせる
 よべの雨に水高まして川中わが
 飛びし石はかくれて見へず
 そここに陽かげさし來て山坂の
 路は小さき庵につゞけり

東京より

西崎樂堂

「前略」
 昨日藤公七絶書軸一つ、關雪五
 字額一つ相求め申し候。藤公の絶
 句は
 論文諸友多實士、譜面美人皆白
 頭、十五年前狂社牧、西遊復上
 舊書樓。
 とあり、いかにも藤公の面目が隨
 如として紙上に横溢して居る感有
 之候。將來愛藏の一品を増し申し
 候。又關雪の書は

潭水寒生月
 とあり、筆致頗る枯淡にして毫に
 味ふべき一品たるを失はず、他日
 貴體に入れ可申候。小生昨今の日
 常は、

×
 酒飲めず肉は喰はず春も打てず
 ぶら／＼暮らす日の水き哉
 ×
 覺て起きて食ふて午睡の若葉哉
 とども黙行可申乎、まゝ書畫い
 ぢりが難らしく候。
 追て方落書伯の作常は可然羨羨
 せしめられ度小生歸朝の途までに
 出來居れば頗る妙と存し候。
 (六月十六日本郷にて)

編輯後記

一 記者

いよ／＼夏景色となりました。
 御健康は如何でせうか。
 本號には大分集まりました。締
 切後も、車田さん、大島さん、市
 村さん、その他から七八篇到着。
 残念乍ら次の號へ廻しました。
 本號は際物的に、夏の讀物號等
 はやりません。終始同一歩調でや
 つて行きます。尤も時分納、海邊
 山間等へ御遊覧の際は、どうぞそ
 の清風の涼味を、精々御通報願上
 げます。

細工の 京
 本御用は 徳
 本町 城
 徳力へ
 電本三九三九
 金 白銀金
 地金、御用、
 赤城明石町
 徳力本店出張所
 電本二〇七八

大正十五年六月廿八日印刷
 大正十五年七月一日發行
 一部定價金四十五錢
 京城府和泉町一六四
 編輯行 象 松本 武正
 印刷人 石川 利夫
 印刷所 京城日報社
 京城府和泉町一六四
 發行所 京城雜筆社
 電話 光化門三〇六

官製食卓鹽

電機諸機械

コンヂットチユープ

ラヂオ

は用御の

命下御へ店幣

すま上願

京城南大門通三丁目

富田商會

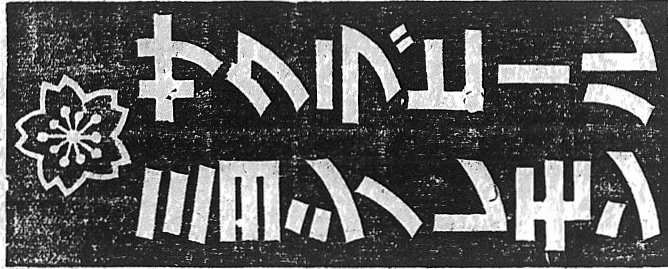
(長)電本三三〇九

種各物金

京城本町三ノ四二

近藤安吉商店

電話本局三番



店商木鈴

店支城京

既製品が澤山あります

夏
向背
廣服

オ
バー

ト
ー
コ
ン
シ
イ
レ



新地質續々到着い

たしました

仕立は念入り價格

は安い

京城鍾路一ノ一九

角田洋服店

電話光化門九五五番
振替京城一八四三番

御注文で特製致します

電鐵營業哩(廣軌) 三二哩

水力發電出力 八、七五〇基

金剛山電氣株式會社

本社 江原道鐵原

出張所 京城府外沓十里

取締役社長 工學博士 久米民之助

專務取締役 マスターオブ
サイエンス 山内伊平

目下京城に參上本園獨創の學童
用葉品を販賣して居ります。兒
童のあたまたに悪い虫が居ります
と、健康にも學術能率にも大變關
係します。
どうか本園創製の絶滅薬を御歡
迎下さい。

小股風樹園

園主 小股 愨